BanG Dream!外伝　青い薔薇と白銀の戦士

リョースケ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

父の———自分の音楽を認めさせようと歌い続けるもの…

そんな友を見守ろうと決意したもの…

妹へのコンプレックスを強く抱いているもの…

自分自身を変えたいと強く思っているもの…

姉を目指し走り続けるもの…

そして、街を守り続けると決めたもの…

それぞれが、それぞれの思いを持って在籍しているバンド――Ｒｏｓｅｌｉａ

これは、とある少年と少女。そして、一つのバンドの物語。

※ラブライブ！の方でも小説を書いているので良かったら是非。

目次

プロローグ ―― 1
第1話　街の守護者 ―― 7
第2話　友の真実 ―― 17
第3話　ボロボロのスコア ―― 29
第4話　バンドの奇跡 ―― 41
第5話　それぞれの思い ―― 52
第6話　少しの勇気 ―― 63
第7話　Roselia ―― 80
第8話　秘密と傷 ―― 108
第9話　謎の戦士 ―― 121
第10話　新たなライダー ―― 135
第11話　戦士の決意 ―― 149
特別編　ベストマッチ!! ―― 168
第12話　勇気を力に ―― 182
第13話　その男は何を思い、戦うのか ―― 204
第14話　世界中に笑顔を ―― 218

プロローグ

「グォォァォ！」

人ならざるものの雄叫びが聞こえる
いや、人だったもの……と言った方がいいかもしれない
そして、その足元には灰が落ちていた

「また、守れなかったか……」

俺はそう言いながら、被っているフードを深くした

「なんだ？お前は……」

俺の存在に気付き、俺に向けて怪人――――オルフェノクが言った

「俺は……」

そう言いながら、ドライバーを取り出し、腰に付ける

「夢を守る者……それだけ言っておくか」

《5・5・5》

「まさか……お前ッ！」

何かを察したかのように、オルフェノクが後ずさりをした

それもそのはずだ、俺の存在は街の人に取っては、街を守る英雄、守護者といっている人もいるが、オルフェノク達には真逆。

自分達を狙う処刑人でしかないからな

「変身！」

右手に持ったものを高く掲げ、ベルトにはめる

俺の姿に赤いラインが入った――――

父の――――自分の音楽を認めさせようと歌い続けるもの…
そんな友を見守ろうと決意したもの…
妹へのコンプレックスを強く抱いているもの…
自分自身を変えたいと強く思っているもの…
姉を目指し走り続けるもの…

それぞれが、それぞれの事情を持って在籍しているバンド――――Ｒｏｓｅｌｉａ

これは、とある少年と少女。そして、一つのバンドの物語。

ＢａｎＧ　Ｄｒｅａｍ！外伝

登場人物紹介

乾　一也

本編の主人公。

リサ、友希那の幼なじみ。いつもクールで誰にでも優しいが、どこか抜けている。

商店街でも顔が広い

今井　リサ

Ｒｏｓｅｌｉａのベース担当

見た目が派手なため、不真面目だと勘違いされやすいが、本当は面倒見が良く情に厚いタイプ。おしゃれに詳しく明るい性格で、友達も多い。

家が翔太郎の住んでいる隣という事もあり、よく上がり込んでいる

湊　友希那
Ｒｏｓｅｌｉａのボーカル
芯が強く、自分の信じたものを決して疑わない、純粋な性格。信じるものに対して盲目的になってしまい、周りが見えなくなることも。人前であまり笑顔を見せない

氷川　紗夜
Ｒｏｓｅｌｉａのギター担当
真面目で神経質。手を抜くことを知らない性格。真面目に生きすぎて損をするタイプ。実はふわふわした動物が好き。双子の妹にコンプレックスを抱いている。

宇田川　　あこ
Ｒｏｓｅｌｉａのドラム担当
姉のことが大好きで憧れており、自分も「カッコ良くなりたい！」とドラムを始めた。いつも「カッコイイ」を探している。変な言葉づかいはその副産物。

白金　燐子

Ｒｏｓｅｌｉａのキーボード担当

とてもおとなしく、引っ込み思案な性格。引きこもりで消極的だが、「これ」と決めたものを極めるタイプ。ピアノとオンラインゲームはその賜物。

第1話　街の守護者

ピピッピピッ

俺の耳元で目覚ましがなっている

本当なら起きなければ行けないのだが、昨夜の事、と言ってもオルフェノクが暴れただけなのだが、それがあったせいで眠れていない

家には誰も居なく、余裕で無視して寝れるはずだった

しかし、

「起きろーーーーー!」

「うぉっ!」

俺の幼なじみによって無理やり起こされたのだった

第1話　街の守護者

通学路――――

「眠い……」

「何言ってんのさ、あのまま寝てたら遅刻してたよ」

俺の横でリサが言った

見た目はギャルぽいが、めちゃくちゃ面倒見がいい

ちなみにこいつは俺の幼なじみで俺の家の隣に住んでいる

「そう言えばさ、今朝のニュースみた？また、怪物が出たんだって」
「らしいな」
「ちょっと不気味だよね」

ココ最近、オルフェノクに関する問題は増えてきている。不安になるのも当然か

昼休み――
『謎の戦士、夜に現れた怪人を撃退』か……」

昼休み、俺は屋上でネットニュースを見ながら、昼飯を食べるのが日課になっている
これは、どこら辺にオルフェノクが出ているかなど、情報を得るために欠かさずやっ

ている事だ

スマホをスクロールしながら、ベンチに置いてある最後のパンを取ろうとした。

「あれ？」

が、パンの感触が無く、横を見てみるとパンが消えていた

そして、

「やっぱ、山吹ベーカリーのパンは美味しいですねぇ」

「お前なぁ……」

この気の向けた声の持ち主と言えば…

俺の横にモカが俺の最後のパンを美味しそうに食べながら座っていた

こいつとは、学校でも商店街よく会う。

ただ、俺のパンを狙ってるだけだけど

「折角、滅多に買えないチョココロネだったんだぞ！」
「売れてるだけあって美味しいですねぇ」
「そう言う事じゃない！」
「相変わらず、仲いいね。お２人さん」

そこにリサが加わった

「山吹ベーカリーのチョココロネっていっつも売り切れてるよね」
「ですよねー。あ、先輩良かったら調べてくれませんか？暇そうだし」
「俺もそんな暇じゃない」
噂では黒髪の女子高生が買い占めているらしいがな

軽く受け流しながら、俺は情報収集に戻っていた
俺が今気になっている事件は一つ。
ここら辺で相次いでいる連続誘拐事件だ

目撃情報も無く、警察の捜査も難航していた

俺には、ここまでくるとオルフェノク絡みの事件としか思えなかった

早く手がかりを見つけないとな……

リサｓｉｄｅ

「はぁ……」

私は１人、ため息を付いていた

昔は友希那も一也も一緒に帰っていた

でも、友希那はソロ活動に集中していたり、一也も何かすぐ家に帰っちゃうし、１人で帰る事がほとんどになってしまった

それと、友希那のお父さんの事があってから友希那は、笑う事が無くなった

一也もたまに思いつめた表情をしている。今日の昼も、ニュースを見ながらそんな表情してたなぁ……

「また3人で笑える日、来るのかな……」

空を見上げて思わず呟いた

その時だった――――

「う、うわぁぁぁ」

裏路地の方で何かが聞こえた

私がそこを覗いて見るとそこに居たのは、人が灰に変わっている瞬間だった

「う、嘘でしょ……」

自分の目の前で起きていることが信じられなかった。
ここにいたらまずい。そう自分の本能が告げていた

逃げようと足を引いた時、そこにあったゴミを踏んでしまい音を出してしまった

そして、その音に気づき、怪人が後ろを振り返った

「ヤバッ！」

私は全力でその怪人から逃げた。

捕まらないよう走っていたら、突き当たりまで来てしまった

「追い詰めた」
「ヒィ……」
完全に追い詰められた
怪人が1歩1歩近づいてくる

殺される……！

そう思った時だった

《ｓｉｎｇｌｅｍｏｄｅ》

「うわぁ!?」

赤い球みたいなのが、怪物に当たった

「間一髪だな」

「だ、誰だ！」

怪人が振り返る
夕日に照らされ見えるシルエット
それは……

「一也…？」

一也は、何かを腰に付け、ガラケーみたいなものを操作した

《５・５・５》
《ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ……》
「変身！」
《ｃｏｍｐｌｅｔｅ》

一也が立っていた場所には、銀色の体に赤いラインの入った戦士がいた

第２話　友の真実

「ほら、これでも飲め」
「ありがとう…」

とりあえず、リサを保護して事務所に連れてきたけど、オルフェノクは取り逃してしまった
姿とあの跳躍力からして、猿の記号の奴か…

「ねえ、一也」
俺が考え事をしているとリサが話しかけてきた
「なんだ？」
「一也は……ずっと、あんなのと戦ってたの？」
俺は答えに迷った

この事を知ってしまえば、戦いに巻き込んでしまうかもしれないけど、ここまできたら言うしかないか…

「あぁ……分かったろ。俺と関わっていたら危ないことも」
「でも！……私だって力になりたい！」
「……危険だ。お前、さっき死にかけたんだぞ！」
「でも！」
「……帰ってくれ」

第2話　友の真実

翌日――――

「今日も特に成果は無しか…」

俺は椅子に寄りかかりながら呟いた
学校が終わった後もいろいろと探ってみたけど、特に誘拐犯に繋がる事も昨日のオルフェノクの事も分からなかった
「ま、明日も探ってみるか」
夕飯を食べようと立ち上がった時だった
トントン
「ん？はーい」
誰かがドアをノックする音がした
時間は７時。こんな時間に誰が？
「一也くん、うちのリサ来てない？」
しかし、そこに立っていたのはリサのお母さんだった

「いえ、来てませんけど……」
「そう……あの子、どこ行ったのかしら…」
「え……まだ帰ってきてないんですか!?」
「そうなのよ……何やってるのかしら?」

まさか……あいつ!
この時、俺の中にある仮説が思いついた
あいつは、オルフェノクが変身する所を見ている。つまり、誰がオルフェノクを見ているかもしれない
そうなると、オルフェノクがとる行動は、一つ…

「おばさん、ちょっと探してきます!」
「え!?ちょ、一也くん!?」

俺は家を後にし、駆け出した

「あのバカ……!あれだけ首突っ込むなって言ったのに…!」

バイクに乗りながらそう呟いた

リサｓｉｄｅ

「う……うん…？」

私が目を覚ましたところはどこかの倉庫の様な場所だった

私、確か…一也を見返してやろうとして、色んな所を探してて……それでどうなったんだっけ？

「目が覚めたか」

声がする方を見てみると、見知らぬ男性が立っていた

「だ、誰!?」

「あぁ、こっちの姿は初めてか。これなら覚えているだろ」

そう言うと、顔に動物のようなものが浮かんだ

そして、その人が昨日見た怪物に変わった

「え……」

どうゆうこと?まさか、話題になってる怪物って人だったの?

「お前も運が良かったら、俺達と同じになれるさ」

「こ、来ないで!」

そう言っても怪物は、1歩1歩近づいてくる

怖さのあまり、思わず目をつぶる。

その時———

「はぁあ!」

「な、なんだ!?」

何かが壁を突き破って私の前で止まった

「ったく、面倒かけさせやがって……」

「一也!?」

それは、バイクに乗った一也だった

「言っても聞かないなら、もう止めない。だったらこれだけは言っとくぞ……」

一也は、少し間を置き、昨日のガラケーみたいなものを操作しながら、こう言った

《５・５・５》

《ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ……》

「俺の側から離れるな！」

「変身！」

《ｃｏｍｐｌｅｔｅ》

一也が昨日と同じように変身した

「来いよ」

「クソがァァ！」

怪物が一也に向かって一直線に走ってきた

しかし、それに対して、アッパーで動きを止め、怯んだところに肘打ちで追撃をする

「グッ」

今度は殴りかかってきたが、それを受け流し、回転しながら後ろ蹴りをした

強い、その一言だった

「何なんだよ…！強すぎるじゃねぇか……」
「当たり前だ、お前とはくぐってきた数が違うんだよ」
《ｒｅａｄｙ》

腰から何かを抜き、足に付ける
《ｅｘｅｅｄ　ｃｈａｒｇｅ》

「はぁ！」
回りながら、怪物に何かを放った
そして、それを打たれた怪物の動きが止まった
それに向かって走っていき、蹴りを決めた
「うぉぉぉ！」
「グァァァ！」

その攻撃は、激しく回転しながら怪物を貫いた

そして、怪物にΦの文字が浮き上がり、それと共に、青い炎を上げて灰になった

一也ｓｉｄｅ
翌日――――

「あれ、先輩、今日は弁当なんですね」
「まぁ、な」

モカが言うように、今日は弁当だ
それはと言うのも今朝に遡る

「はい、これ」
「何これ？」

いつもの通学路、リサがバンダナで包んだ何かを渡してきた

「何って弁当だよ」
「は!?」
「いっつもパンばっかり食べてたら力つかないよ」

確かに、それはあるかもしれないが……
とゆうかその前に

「お前なぁ、俺に関わるなって言ったろ」
「でも、俺から離れるなとも言ったよ」
「うっ…」

それを言われると言い返せない…
何であんな事言ったんだろ

「今日から毎日弁当作って上げるからねー」

リサは、にこやかにそういった

なんて事があったなんて口が裂けても言えない

「センパーイ、教えてくださいよー」

モカの催促を無視して、弁当のおかずを食べた

「美味いな、意外と」

「じゃ、私も一口」

「やらねぇーよ」

第３話　ボロボロのスコア

第３話　　ボロボロのスコア

俺はリサに俺のベルトの事、オルフェノクのことを話した
と言っても、俺が知っているのは、オルフェノクが人間を脅かす存在である事ぐらいだ
このベルトも差出人不明で俺宛に届けられていたからな…

数日後――――

「えっ？友希那、今の話ってマジ？」
「ええ、本当よ。バンドを組んだわ。紗夜って子と。まだ、ボーカルとギターだけだけど、コンテストに向けて新しい曲も出来上がってきてるわ」

「マジかよ…」
今、俺とリサが話しているのは湊　友希那。俺とリサのもう1人の幼馴染だ
「そっか……あはは、なーんだ。教えてくれなかったからびっくりしちゃったじゃん」
「友希那がいつにバンドかー。私と一也以外とつるまないで1人でいるからさ。結構心配してたんだよねー」

確かにリサの言う通りだ。
友希那は、自分のレベルと同じやつにしか話さない。
そんな友希那が選んだ紗夜ってどんな奴なんだ？

「リサ……でも、私は……本気だから。私もその子もＦＵＴＵＲＥ　ＷＯＵＬＤ　ＦＥＳに出たい…目標が一致したから組んだだけよ」
「それに、これはお父さんの…」
ＦＵＴＵＲＥ　ＷＯＵＬＤ　ＦＥＳは、プロでも予選で落ちるという、かなり難易度の高いフェスだ。
そして、このフェスで友希那の親父さんは……

「ん……分かってる。目標は置いといて私は嬉しいよ。友希那と一緒に練習してくれる仲間が出来たって事だし」
「俺も良かったと思う。でも、どうするだ？確かそのフェスは、３人以上が条件じゃなかったか？」
「リサ、一也…バンドを組むことを止めないの？」
「友希那は、私達が止めたら、止めるの？」
「リサ…」
友希那が何かを言いかけた時だった
「ゆ、友希那さん！お願いします！」
「ん？」
俺達が話している中に割り込むように別の声が入った
特徴的なツインテール。こいつは……
「あこ？」

「どしたの？」
「リサ、知り合いなの？」
俺達の会話に無理やり入ってきたこいつは、宇田川あこ。
確か、この学校の中等部で、リサの後輩だったけ？

「お願い！お願いお願いお願いしますっ！絶対いいドラム叩きます！お願いします!!」
「ちょっと待て。話が全然見えて来ないんだが…」
「あこ、ドラムやってるんだっけ？友希那のバンドに入れて貰いたいの？」
なるほど。友希那の性格からして、何度も断ってんだろうなぁ…

「うん！でも、何度も断られちゃって……どうしたらあこの本気が伝わるかなって考えてそれで……えっと…」
「友希那さんの歌う曲、全部叩けるようになってきました！いっぱい、いっぱい練習してきて……！その…！」
「お願いです！一回だけ！一回だけでいいから一緒に演奏させて下さい！それで…それでダメだったらもう諦めるから！」
「何度も言っているけど、……遊びじゃ無いの」

「まぁまぁ、友希那。イイじゃん、一回くらい一緒にやってあげなよ……ほら…」
「…？」

　そう言いながら、あこが持っていたスコアをとった
「あこの使ってるスコア……こんなにボロボロになるくらい、何度も何度も練習してるってことでしょ？」
「ね？友希那。あこのことは同じ部活だし、知ってるけど、やる時はやる子だよ？」
「……はぁ。……わかったわ。１曲セッションするだけよ」
「！ほ、本当ですか!!……本当!?やったあ…っ！リサ姉、ありがとう！」
「やったーっ。よしっ。ねぇ、友希那！私たちもセッション見学に行っていい？」
「別に…いいけど。どうしたの急に。スタジオなんて随分来てないのに」
「えっ。ど、どうって……別にー？ライブハウス以外で歌ってる友希那も、たまには見たいじゃん？」
「そ、それに紗夜って子がどんなのかも気になるしさー」

　リサの奴…多分、後の方が本音だな。俺も気になるけど

「……そう。好きにしたら」

こうして、俺達は、友希那達が練習するライブハウスに向かうことになった

「どうした？」

友希那とあこの後ろに付きながらスタジオに向かっている途中、リサの顔はどこか暗かった

「……いつかはさ、そんな日が来るとは思ってたけど……ホントに来ちゃったか、って……」

「お前もバンド入ればいいんじゃないか？ベース弾けたろ？」

「私が？ムリムリ。何年もやって無いし。やっても友希那の足引っ張るだけだよ…」

「リサ……」

リサは、友希那の親父の事があって、その後の友希那をずっと見守ってきただから、今回もって事かけどな……

「よく言えたな、俺には関わるなって言っても聞かなかったくせに」
「それはそれ、これはこれだよ☆」

相変わらずだな…

「う、うわぁぁ！」
「!?」

少し立ち止まって話をしていたら、前の方があこの声が聞こえた
そして、あこと友希那の前には、オルフェノクが立っていた
あの腕と角から考えてオックスオルフェノクか

「リサ！友希那達を避難させろ！」
「分かった！」
「え、ちょ、リサ姉!?」
「とにかく、２人ともこっち！」

リサが２人を押すように物陰に隠れさした
《５・５・５》
「ったく……また、こりもなく出やがって！」
《ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ…》
「変身！」
《ｃｏｍｐｌｅｔｅ》
「はぁ！」
右手のスナップを効かせて、オルフェノクに向かって行った

「リサ、あれはどうゆうこと？」
物陰では、友希那がリサに詰め寄っていた
「え、えーと、私もよく分からないんだけど……一也が、あの怪物、オルフェノクと戦ってるの。街を守るために」
「そう……」

そして、あこは――

「カッコイイ……！」

１人、目を輝かしていた

「オラァァ！」
「よっと」
オックスオルフェノクが鉄球の様な拳を殴るように攻撃してくるのを交わす

そして、カウンターを狙って、顔に向けて蹴りを放つ
しかし、
「ふん！」
その腕で防がれてしまった

「ぐっ…これじゃ埒が明かないか…！」
「どうした？そんなものか？」
「言ってくれるな……なら、そっちから来いよ」
「言われなくとも！」

そう言いながら、こっちに拳を振りかぶりながら向かってくる

《ｒｅａｄｙ》

それに対して、俺は左腰にあるファイズショットを抜き取り、ミッションメモリーを装填した

《ｅｘｅｅｄ　ｃｈａｒｇｅ》

ベルトのエンターキーを押すと、ベルトから腕まで赤い線が光る
チャンスは一瞬……！

「うらぁぁぁぁ！」
「今だ！」

俺に向かって攻撃をしてくる直前、深くしゃがみこみながら交わし、胴体に向けて拳をだす

「はぁ！」

当たったところから衝撃が全身に広がる

「うぁ……あああ！」

断末魔の声を上げ、体から青い炎があがり、灰になった

「一也さん……かっこいい！」

オルフェノクが灰になったのを確認すると、リサ達が物陰から出てきた
あこは目を輝かせながらだったが
けど、また、リサ達を戦いに巻き込んでしまった

「……」
「一也？」
「いや、何でもない……行こう」

俺はライブハウスに向けて歩き出した

第４話　バンドの奇跡

第４話　バンドの奇跡

「懐かしいなぁー。このスタジオーーーって感じの空気。最後に入ったの、中２の夏休みだっけ？」

途中、オルフェノクが出たが何とかスタジオにたどり着くことができた

「いや、中２の時は俺を無理やり付き合わせて海ばっか言ってたろ」

「え!?じゃあ、友希那さんも一緒に？もしかして、海でライブ!?……超かっこいい！」

「いや、私は行ってない」

俺達がロビーで話していると、花咲川の制服を着た子が出てきた

「湊さん、この人達は？」

「あ。挨拶が遅れちゃってごめんね！アタシ今井リサ。友希那の幼馴染で、今日は見学に来ました」

「俺は乾　一也だ。後はリサと同じだ」

「宇田川あこですっ！今日はドラムのオーディションをしてもらいに来ましたっ！」
「オーディション？」
「ごめんなさい、リサが……あ、いいえ。私がその……彼女のテストを許したの」

この子が、友希那とバンド組んだって奴か……どことなく友希那に似てるな

「とゆう事は……実力のある方なんですよね？」
「……努力はしているらしいわ。勝手に練習時間を使ってごめんなさい5分で終わらせるから」
「いえ、湊さんの選出なら、私は構いません……ただ、少し……意外です。あなたはどんな形であれ、音楽に私情を持ち込まない人だと思ってましたから」

「私情……か……」
「一也？」
「いや、何でもない」

友希那は、あの事を話していないのか。いや、あのことは話さない方がいいかもしれ

ない。
　友希那がとある理由で音楽を続けている事を……
「その価値観はあなたと合致しているつもりよ。実力が無ければ、２人ともすぐ帰ってもらうわ」
「はい、分かってます！」
「え!?私も？」
「見学は終わり。紗夜の顔ならもう見たでしょう。……リサ。昔、遊びで入っていた時とは違うの」
「……あっ。そ、そうだったね。あはは、ごめんごめん！その時はすぐ帰るって。なんか……アタシ一瞬、昔に戻った気になっちゃったな」
「リサ姉！あこ絶対合格するように頑張るからっ！」
「ん。そうだね。あこファイト！」
　スタジオ――――

「できればベースもいると、リズム隊として総合的な評価が出来るんだけど……」
「そうね。こればかりは仕方ないわ。このまま……」

どうやら、ベースが弾けるやつがいるらしい。
でも、俺はベーシストを1人だけ知っていた

「いや、いるだろ。ここに」
そう言って俺はリサを指した
「えっ!?私!?」
「えっ、リサ姉ベーシストだったの
?」
「来たついでだ。弾いとけ」
「でも……」

俺は、リサの近くにいき、小声でこう言った
「後悔してもいいのか?」
リサの性格として、友希那の事をほっとけない

これからも、というのであれば、友希那の近くにいた方がいい

「……うん、私弾くよ。待ってて、ベース借りてくるから」

そう言って、リサは、フロントにベースを借りに行った

全く、世話のかかるヤツだ

「ただいま！準備オッケー！」

「湊さん、今井さんは経験者何ですか？」

「一応。譜面で一通り弾くことは、今でも出来ると思う」

「一通り……ね」

明らかに紗夜って奴は不満そうだった

ま、音楽でトップを目指してる奴からすれば当然か

「あ、このネイル？大丈夫。私、指弾きしないから」

「ベースはスタジオの備品ですから、変な弾き方をして、楽器を痛めないでくださいね。私はあくまで宇田川さんのテストなら、問題ありません」
「それじゃ、いくわよ」

友希那の声で演奏が始まった
でも、何だ？この感じ…？
とても初めて一緒に演奏したとは思えないくらいまとまっている
それにリサも全くブランクを感じさせない……
これは……一体…？

「「……」」
演奏が終わって、紗夜と友希那は、不思議な顔をしていた
音楽に素人の俺でもすごいと思った。演奏者なら、尚更、感じ取っているだろう

「あの……さっきからみんな、黙っているけど……あこ…バンドに入れないんですか？」
「そ……うだったわね。ごめんなさい。いいわ。合格よ。紗夜の意見は？」
「いえ。私も同意です。ただ……その……」

「いやったぁーーーっ!!!
それにしても、なんか、なんかすごかった!!!初めて合わせたのに、勝手に体が動いて!!」

何かを言いたそうにしていたが、あこの喜びの声にかき消されてしまった

「！アタシも……！あこもそう思ったんだ！なんか、いい感じの演奏だったよねっ。……てことは、２人も……？」
「そうですね。これは……」
「その場所、曲、楽器、機材……メンバー。技術やコンディションではない、その時、その瞬間にしか揃い得ない条件下でだけ奏でられる『音』……」
「バンドの……醍醐味とでも言うのかしら。ミュージシャンの誰もが体験出来るものではない……雑誌のインタビューなどで見かけたことがあるけれど、まさか……」
「なっ、なんかそれってっ、……キセキみたいだねっ！」
「うん。マジック！って感じ」
「その言い方は肯定できないけれど……でも、そうね。皆さん、貴重な体験をありがと

う。あとはベースとキーボードのメンバーさえいれば……」
「え？ベースならここにリサ姉がいるじゃん！」
「いや、私は、その……ヘルプで弾いただけで……」

あれだけ俺が言ってもこれか…

「今井さんは湊さんの幼馴染で、友達として、あくまで宇田川さんのオーディションに付き合うために弾いただけ。そうですね？」
「でも、バンドメンバー探しているんだよね？こんないい演奏できたのに、何でメンバーにしないの？」

俺があこの言うことに賛同しようと口を開きかけた時だった

「確かに、技術的には、メンバーとはみとめられないわ」
「！あ……そ、そりゃそうだよね、はは……」

しかし、友希那は意外な言葉を言った

「ただ、足りないところはあるけど、確かに今のセッションはよかった。紗夜も、それは認めるでしょ？」
「私は……！確かに今の曲だけに限れば、よかったですが……」

それにしても、友希那がリサの加入に前向きなのは少し意外だ
音楽以外、全く興味を持たないのに

「なら、バンド組もうよ！この４人で！」
「え？……マジで？」

帰り道――

「ねぇ、一也もバンド入らない？」
　1人で帰ろうとしていたら、リサが唐突にそんな事を言い出した
「何言ってんだよ。楽器も出来ない俺にバンドなんて入る資格なんて……」
「でも……ほら！マネージャー的な事とか……」
「リサ」
「俺と居たら、友希那の……夢を壊してしまうかもしれないだろ」
「一也……」
「じゃあな」
「……これで良かったんだ……」
　今日の事ではっきり分かった。俺といればあいつらに危険が及ぶ

あいつらと距離を取る。それが俺に出来る唯一の事だ……

第5話　それぞれの思い

第6話　それぞれの思い

白金家――――

『でね！あこもリサ姉も加入していいよって言われて！今日のことは、一生忘れない!!』
画面の向こうであこが言っている
それを聞くのは彼女のゲーム仲間である白金　燐子だ

「オーディション合格おめでとう！あこちゃんの努力が認められたんだね」
『でも、努力だけじゃないかも』
「どうゆうこと？」
『曲が始まったら、勝手に体が動いたの！すっごく上手に叩けて、リサ姉はマジックって言ってた！他のメンバーもいつもより、うまく演れたって』
『友希那さんも言ってた！みんなそう思ったんだよ！すごくない!?』

「そんなことがあるんだ。うん、バンドってすごいね」
『すごいよ！やっぱりバンドって最高！みんなと演るのって、楽しすぎる！ずっと１人で練習してたから、超感動したよ！』
「……みんなで……」

彼女は大人しく、１人で何かを極めるタイプだ。その性格からピアノとネットゲームを極めている
ゲームの腕もかなりのものらしい

（昔からずっと、１人で弾いてるピアノ…大好き、だけど……誰かの一緒になんて……私は……考えた事もない……）

『みんなが集まると何が起こるか分からない！奇跡って、たぶんこーいうことだよ！』
「……奇跡……」
「バンド、きっと成功するね。私も応援する」
『ありがとう！本当に嬉しいよ！りんりんも何か音楽初めてみたら、この感じ分かるよ！』

（あ……私……あこちゃんにピアノの話、してないんだ）

燐子はよく、と言うよりほぼ聞き手に回っている。それはあこが常に何かの話題をもっているからだ。ネットで喋りすぎてオフ会で話題がなるなる事もないらしい

その結果、自分自身の事をあまり話せてはいない

『バンド名はまだ決まってないんだ。りんりん何がいいと思う？』

「……」

『りんりん？もしかしてもうゲーム、インした？なら我も出陣するのでしばしか待たれよ』

応答がない燐子に向かってあこが問いかける

ちなみに、この口調はかっこいいを追い求めた結果で厨○病では無いらしい

「あっ、まだインしてないよ。その前にもう少し、あこちゃんのバンドの話を聞いたらダメかな？」

『任せよ！今宵は一晩中語り明かそうぞ！』

「ありがとう。嬉しい」
（……バンドの話……不思議だけど……聞いてるだけですごく……楽しい……）
これが彼女がバンドに興味を持った瞬間だった――

氷川家――

（今日のセッション……不思議な感じだったわ……）
紗夜は、今日のセッションの事を思い出していた。今日の事は彼女が今まで体験したことのない事だった
「おかえり～！……お姉ちゃん、何見てるの？」
そんな事を考えながら、スマホのサイトを見ていると、双子の妹、日菜が部屋に入っ

てきた
「！日菜。スマホのぞき込まないでって、いつも言ってるでしょ」
「何のサイト？……ＦＵＴＵＲＥ　ＷＯＵＬＤ　ＦＥＳ？なにこれロックのイベント？」
「これは私の事で、日菜には関係ない」

「……そっかー。関係ないかー。じゃーさ、じゃーさ、リビング行かない？お姉ちゃんの好きなわんこの番組、お父さんが見てるよ」
「録画してあるから、あとで見るわ。今忙しいの。だいたい、日菜は犬、別に好きじゃ無いでしょ」
「でも、お姉ちゃんは好きじゃん？わたし達双子じゃん？たまには一緒になにかしても……」
一緒、その言葉に紗夜は激しく反応した
「いつもあなたは、一緒のことばかりするじゃない」
「……！お姉ちゃん、あたしは……」

「同じ日に生まれて、私の方が少しだけ先に生まれたからって、なんで同じことをされないといけないの？」
「もう高校生なんだから、お互い干渉しないって約束したでしょう。自分の部屋に帰ってちょうだい。私は練習があるの」
「……わかった。……あの。ごめんね？」

（『フェス』の事が日菜に知られたら、私の真似をして、必ず自分も出ると言ってくる）
（そして今までしてきたように、私の努力を、軽々と才能で追い抜いていく……）
紗夜はこれまで、日菜に勝ったことが無かった。それもいくら努力をしても。
その結果、紗夜はいつの日か日菜を遠ざけるようになって行った

「比べられるのは、もうたくさん。……必ず、頂点を獲ってみせる……」

これが紗夜の頂点を目指す理由だ。

今井家、湊家前――――

「いやー、なんか驚きの展開だよね。友希那とバンドか。うん、アタシ頑張んなきゃ」

リサは改めてバンドを頑張ろうと決意を固めていた

「……あの時はセッションの勢いもあって何も言わなかったけど、メンバーの意見に従うひつようは無いわ」

「ん。でもさ、アタシ……友希那をほっとけないから。アタシには友希那を1人にさせないって使命があるからね。だから、バンドもやる」

「バンドは、そういうのとは関係……」

「うん。バンドはバンドでいい。アタシはそんな友希那の近くにいたいの」

（いつか……ちゃんと友希那が昔みたいに、笑えるようになるまで）

リサと一也は唯一、友希那の過去を知っている。でも、一也が戦っている以上、彼に負担を増やすわけにはいかない

「それだけだからさ！」

「……ついて来られなくなったら、幼馴染でも……抜けてもらうから」
「はーいっ！そのために、練習がんばりまーすっ！」
「バンドメンバーが揃ったら、ＦＵＴＵＲＥ　ＷＯＵＬＤ　ＦＥＳ．出場のコンテストに出る。それは、ちゃんと分かってるの？」
「うん……そうだね。わかってる」

それは一也もよく知っている事だった。自分と居れば危害が及ぶ。それを理解して自分から身を引いた。
彼女の夢を守るために

「メジャーで『売れる音楽』をきょうようされ、苦しんでいたお父さんを、『今の君達の音楽は要らない』と切り捨てたあのフェス……」
「――お父さんは、そのせいで音楽を辞めた。ずっと憧れていたステージに拒まれて……だから、絶対に失敗は許されない。許さないから」
「うん。アタシはブランクもあるし……みんなより技術もない。でも――頑張るよ」
（友希那がそんな顔をしているうちは、はなれるわけには、いかないから）
「……なら、好きにして」

「うん！じゃ、また明日！」
「……リサ」

家に入ろうとしたリサを友希那が呼び止めた
「リサは……一也の事、どう思う？」
「え？……それは今日の事…？」
友希那が無言で頷く
「一也には関わるなって言われたよ。でも……」
「でも？」
「ううん、だからこそ、ほっとけない。私に何が出来るか分からないけどさ」
「そう……悪かったわね。呼び止めて」
「ううん、大丈夫」

リサが家に入っていった

乾家――――

「……」

俺はベットに横になり天井を見ていた
最近になって、オルフェノクが暴れることが増えた
奴らが何を考えているかは知らないが、１人で戦う事に少し危機感を覚えていた

でも……オルフェノクと戦えるのは俺だけだ。そして、その戦いにリサ達を巻き込んではいけない

「やるしかないか……」

静かに拳を握った

憧れ、興味、嫉妬、夢、決意…

それぞれが、それぞれの思いを胸に、夜が更けていく――

第６話　少しの勇気

「ねぇねぇ、一也さん」
友希那をリサとあこと待っていると俺に声を掛けてきた

「ん？どうした、あこ」
「一也さんが変身したやつって名前あるの？」
「あ、それ、私も気になってたんだ」
「あー、あれか。一応、ユーザーズガイドには『ファイズ』って書いてあったけど……」
「あぁ！５を三つ入力するからか！」
「違う、オルフェノクが灰になる時Φの文字が出てくるだろ。あれからだろ」
「だったら、もっとかっこいいやつにしない？」
「お、いいねーそれ」
「おい、俺は名前を考えてくれなんて一言も……」

と俺が止めようとしても、２人は完全に無視して話し合っていた

「じゃあ、あこが考えたやつ！『魔界より降臨する守護者』なんてどうかな？」
「却下」
「ええ！何で!?」
「長い、シンプルなのにしろ」
「だったら、『魔物を狩る…』」
「却下」
「まだ、途中だよ！」

俺とあこが言い争っていると、リサが口を開いた

「だったら、『仮面ライダー』なんてどうかな？」
「仮面？」
「ライダー？」
「うん、ほら、バイク乗って仮面みたいなの付けてるし……どうかな？」
「なんか、シンプルでかっこいい！それにしよ！」

勝手に話が進んでいるが、あこが考えるやつよりかはマシか

「もう、それでいいよ」

仮面ライダー……か

「あ、友希那さん！今日も練習よろしくです！」

そうこうしていると、友希那が校門の所にやってきた

が、しかし…

「私は先に行くわ」

まさかの完全スルー

「ええ？先も何も、行き先一緒じゃん！……って、もう、友希那！追いかけよっ、あこ、

一也！」
「うんっ！」
「なんで、俺まで……」
　まぁ、結局俺もついて行くんだけど…

「友希那さん、待った！とーせんぼ！」
「……どいて」
「ってやりすぎちゃったか～。ごめんごめん！行くとこ一緒なんだから、並んで歩くくらいいいでしょ？」
「そうです、いいでしょ？」
「……はぁ。分かったわ。なら少し、静かにして」
「「やった！いえーいっ！」」
「……あなた達を加入させたのは、早計だったかも……」

「……ん？リサその指どうしたんだ？」
「えっ？」
「ほんとだ……ネイル全部はがしちゃってボロボロ……？」

「!!」

今まで気づかなかったが、リサの指はボロボロになっていた。恐らくあこの言う通り、ネイルを剥がした事が原因だろう

「い、いや～……これは……その…ほ、ほら?なんかネイルするだけがギャルじゃないし?爪からシフトチェンジってゆーの?イメチェンイメチェン!」

「お前……ベース弾くために……」

「そんな事よりさっ、あこ!練習終わったクレープ食べない?あの裏通りにできたやつ」

「クレープ!知ってる知ってる!いっつも混んでるところだよね」

「……リサ。ネイルをとるのは正しいわ。でも、ペースは守らないと、指を壊して……」

「分かってるってば～。友希那と一也も一緒に、って行かないかぁ～あはは。アタシ生クリーム増し増しでいこっと!」

「……リサ……」

翌日――――

「きやあああ！」
「はぁっ！」

オルフェノクが襲いかかる寸前で、蹴りを入れた

「お、お前は…！」
「ったく…休む暇もねぇな」

俺が拳を構えてオルフェノクと向かい合う。するとオルフェノクは……

「チッ！」
「あ、待て！」

そのままどこかへ逃げてしまった

「大丈夫か？」

変身を解除して、襲われかかっていた子の近くに行く

「う、うぅぅ……」

「え？」

そのままその場に倒れ込んでしまった

「マジかよ……」

燐子ｓｉｄｅ

「は！」

私が目を覚ました場所は襲われた近くの公園だった

確か、襲われそうになった時……

「目覚めたか？」

「うわ！」

そこには全く知らない男の人が立っていた。服装からして、学生だろうけど……

「そんなに怯えんなよ…俺は倒れてたお前をここまで連れてきただけだって」

「そ、そうなんですか…？あ、ありがとうございます…」

でも、なんだろう…？この人……初めてあったのに…怖くない……

「ん？どっか痛いとこでもあるのか？」

「あ！いえ……少し…考え事を……」

「そっか……話してみるか？」
「え？」
「案外、知らない人に話したら楽になるかもしれないぜ」

普段だったら、知らない人となんか話さないのに、何故かこの人は信用できた

それから、私はあこちゃん達のバンドと一緒に演奏してみたい事を話した。でも、その１歩が踏み出せない事を……

すると、その人はこう答えてくれた

「少しずつでいいんじゃないか？」
「…少しずつ……？」
「あぁ、自分のやれる事、やりたい事、少しずつやっていけば、いつかそれが力になる。俺はそう思う」

やりたい事……私は――――

「1人で帰れるか？」
「あ、はい……いろいろとありがとうございました」
「気にすんな」

そう言って、その人は近くに止めてあったバイクにまたがって、エンジンを付けた

「……あの！……名前……聞いてもいいですか…？」
「名前？そうだな……」

その人は少し間を置いてこう言った

「『仮面ライダー』そう名乗っとこうか」
「仮面……ライダー……？」
「じゃあな」

そう言い残しその人は去っていった
不思議な人だったな……

一也ｓｉｄｅ
１人の男がさっきの子の後を付けていた

「次の角を曲がったら…」
「させねーよ」
「！」
そう呟き、ファイズフォンを背中に突きつけた
「せっかく、１歩が踏み出せそうなんだ。邪魔はさせない！」
「チィ！」
そう言いながら、男が俺に向かって後ろ蹴りをしてきたがそれを交わす
「なら、お前から始末してやる…！」
そう言って男がオルフェノクに姿を変える。やっぱり、さっきのオルフェノクか
《５・５・５》
「やれるもんなら、な」
《ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ……》
「変身！」

《ｃｏｍｐｌｅｔｅ》

確かこいつはエキセタムオルフェノク。つくしの記号のオルフェノクか

「オラオラオラァ！」

相手が槍で攻撃を仕掛けてくる

それを交わして、攻撃のチャンスを伺うが、相手の方がリーチが長い。

今、こちらの手元にあるのはファイズポインターとファイズショット。どちらも今の状況を打破出来ない

しかし、俺の武器はそれだけではない

手元にないなら、持ってこさせればいい

「そんなもんかぁ？ファイズの実力は？」

攻撃をしながら、相手が話しかけてくる。

しかし、俺はそれを避けながら、ファイズにコードを入力した

「言ってくれるな……だが、その油断が命取りだぜ」

「何？」

《５・８・２・６　　Ａｕｔｏｖａｊｉｎ　ｂａｔｔｌｅｍｏｄｅ》

「ぐはぁ！」

俺の愛車であるオートバジンがオルフェノクに突撃し、俺の前で人型に変形した

これがオートバジンの能力の一つ、バトルモードだ

「ロボットなんかに！」

再び、オルフェノクがオートバジンに攻撃を仕掛けようとするが、オートバジンがタイヤに付いている弾を乱射させる

そして、その隙にバイクのハンドル部分にミッションメモリーを差し込み、引き抜く

これがファイズのもう一つの武器、ファイズエッジだ

《Ｅｘｅｅｄ　ｃｈａｒｇｅ》

「はぁ！」

フォトンブラッドが腕まで行くのを確認すると、肉弾戦をしていたオートバジンのそ

ばから飛びててオルフェノクに攻撃を仕掛ける
しかし、相手も槍で防ぐがそれに沿わすように攻撃をし、相手の胴体に剣を当てる
「はァァァ！」
「うおぉぁぁぁ！」
そして、剣を切り上げた
「はぁ！」
「うぁ…！ぁぁぁ……」
その瞬間、Φの文字が上がり、オルフェノクが灰になった
「ふぅ……」

俺は帰宅後、今まで襲われた、襲われかかった人物の共通点を考えていた
と言っても、襲われかかっていた奴の事は見た目の年齢しか分からないし、消えた人の事も情報が多い訳でない
けど、そこからだけでも何かが分かるかもしれないと思い、調べていたのだ

「ん……？」
ネットなどを探っていると消えた人の簡単なプロフィールが書いてあった
そして、そこには『バンドに入っていた』と書かれてあった
普段だったら、そのままスルーしていたかもしれない。
けど、今日に限って襲われかかっていた子からバンドに入ろうか迷っていると聞いていた

「……ちょっと待てよ……」
俺は今まで消えた人の名前を検索してみた。すると、今日の子も含めほとんどの人が音楽関係で何かしらの賞を取っていることがわかった

それなら、友希那が襲われた事もつじつまが合う

「まさか……な……」

俺はただの偶然だと思った。いや、そう思いたかっただけかもしれない

リサと友希那が狙われる危険がある。その事実から目を逸らすために……

第7話　Ｒｏｓｅｌｉａ

「なぁ、リサ」
「ん？どうしたの、一也？」

俺はこれからバイトに行くリサに声を掛けた

「……明日の練習見学しに行ってもいいか？」
「え？珍しいね。一也から行きたいなんて」
「まぁ、たまには、な」
「いいよ、友希那に聞いてみるねー」

そう言いながら、リサが友希那に電話をかけだした

俺が想像している事が本当なら……
と考えたが、頭を振り無理やり忘れる

偶然だ……それだけを信じて……

友希那ｓｉｄｅ

「……やっぱり……」

私は家で最近起きた誘拐事件の事を調べていた

すると、ライブハウスでステージに立っていた子、ネットや音楽雑誌で取り上げられていた子など見覚えのある顔が多かった

そして、この私も1度襲われている

「……となると……」

《～♪》

その時、スマホの着信音がなった。画面を見るとリサからの電話だった

「もしもし?」

『あ、友希那？明日一也が私達の練習見学に行きたいって言ってるんだけど……いい？』
「……いいわ」
『本当!?じゃあ、一也に伝えとくね～』
「練習の後に話があると伝えておいて」
『えっ!?わ、分かった…
　　じゃあ、明日ね！』

そう言って、リサは電話を切った。
やっぱり…一也も気になっているようね
なら……きっと…

この事も引き受けてくれるはず……

第7話　Ｒｏｓｅｌｉａ

リサと友希那と共にいつも練習に使っているというライブハウスにやってきた

「あ！一也さん！珍しいですね、練習見に来るなんて」

「まぁ、な」

スタジオに入ると元気にあこが出迎えてくれた

中にいたのは、あこと氷川紗夜ってやつ。それと……

「お前は……」

「あなたは……！」

そこには俺がこの前助けた子がいた。入りたがってたバンドって友希那のバンドだったのか

「この前はありがとうございました。私……白金燐子っていいます」
「そうか」

ちゃんと1歩を踏み出せたんだな

「そろそろ始めましょう」
俺と燐子が話していると、氷川が口を開いた
「前にも言いましたけど、邪魔だけはしないでくださいね」
「……分かってる」
「なら、いいです」

相変わらず、こいつは敵意むき出しだな

練習を聞いていたが、キーボードが入ったこともあり、前に聞いた時よりも凄さが増していた。
そして、リサも腕を上げてきていた

明日はイベントがあるらしいが、これならかなりの評価を得られそうだ

「今日はここまでにしましょう」

とりあえず、何もなく練習は終わった

「友希那、一也、帰ろ！」
「リサ、先に行ってて、一也に話がしあるから」
「あ……そうだったね…」
「じゃ、あこ達と帰ろ、リサ姉！」
「う、うん」

そう言って、俺と友希那以外の全員がスタジオから出た
「友希那、話ってのはなんだ？」
「あなたに頼み事があるのよ」

「頼み事？」
珍しい事もあるもんだ。
友希那は大体の事は人に関わらず、1人でやることが多い。そんな友希那の頼みってなんだ？
「あなたに……」
そう言いかけた時だった
「きゃぁぁぁぁ！」
「!?」
外から悲鳴が聞こえた
「まさか！」

俺はアタッシュケースを持ち、外へ飛び出した

「一緒に来てもらおうか！」
「はぁ！」
「くっ」

リサを襲おうとしていたオルフェノクに飛び蹴りを決めた
「お前ら、大丈夫か？」
「う、うん」
「少し下がってろ」
ベルトを取り出し腰に付ける
そして、ファイズフォンを開いた時だった

「やれやれ、あなたの知り合いだったとは、厄介なものですね。ファイズ」
「!?」

２体のオルフェノクの後ろから本を持ってメガネをかけた男が現れた
それにこいつ……俺の事を『ファイズ』って呼んだ。今まで誰にもファイズとは言われてこなかったし、俺の口から言ったのもリサとあこだけだ
となると……かなりヤバイ奴かもしれない

「お前……誰だ」
「あぁ、申し遅れました。私の名前は琢磨　一郎。またの名を…」

そう言うとオルフェノクに姿を変えた

「センチピードオルフェノク」

センチピード……ムカデの記号か。更にオルフェノクが２体。状況としてはかなりまずい
でも、やるしかないな
《５・５・５》
《ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ…》

「変身！」
《ｃｏｍｐｌｅｔｅ》

「はぁ！」
「ふん」
俺とセンチピード達の戦いが始まった

センチピードの武器は伸縮自在のムチのようなものだった

「遅い！」
「くっ」

そして、何よりムカデの記号持ちだけあって動きが早い

「オラオラぁ！」

武器を取り出そうにも3対1だけあって、そんな暇すらくれない

「ぐはっ」
「一也！」

遂に変身が解けてしまった
相当なダメージを受けたのか、意識が薄くなってきた
これはマジでヤバイな……
そして、センチピードが一歩一歩近づいた来た

「これで終わりです！」

ムチを振り上げたとき

《……》
「なに?!」

オートバジンがガトリングを乱射させた
それによって煙幕ができた

「一也!」
「一也、しっかりして!」
煙幕の中、リサと友希那が俺を担いだのはわかった。
けど、そこからは意識を失ってしまった……

「ん……？」
目が覚めると俺は自分のベッドの上で寝ていた
あいつらが担いでここまで連れてきたって訳か

「一也、大丈夫?」

横を向いてみると、そこには、友希那が座っていた

「リサは？」
「今、下で紗夜と燐子に状況を説明しているわ」
「そうか……」

そういや、燐子は俺が変身してるところは見てないんだっけ

「そういや、話ってなんだったんだ？」
「あぁ、その話ね。一也……」

友希那は一区切りおいてこう言った

「あなた、私達のバンドに入る気はない？」

「は？」

いや、待て。唐突過ぎないか？

「なんだよ、いきなり……　大体、俺といたら危険だろ」

「嘘ね。あなたも気付いているでしょ？……　私達がねらわれていることは」

「ッ！」

こいつ気付いてたのか。だから、今日も俺の見学を許したのか

「俺は……」

「あ、一也。目覚めた？」

その続きを言おうとしたとき、リサ達が部屋に入ってきた

「二人でなんの話してたの？」
「一也にバンドに入るように言ってたのよ」
「え？友希那それほんと？」
「ええ。一人くらい雑用が欲しかったから」

いや、狙われてる事を隠すのはいいけど、それはそれで酷くないか？

「本当ですか!?やったぁ！」
「あこ？」
「だって、一也さんがいたらあの怪物だって怖くないもん！」
「！」

意外だった。こんな俺をこんな風に言ってくれる人がいるなんて……

「……　私も……　乾さんが……　メンバーになってほしいです」

「私も一也が入ってくれたら嬉しいな。なんかあったとき心強いし」

あこに続いて燐子とリサも自分の意見を言った

「お前ら……」

人と距離を取っていた俺が人に必要にされたのはいつ以来だろうか……

「一也。あとはあなた次第よ」

「俺は……」

俺の答え。それは……

ライブ当日一一一

3人の男がライブハウスに向かって歩いていた

「チケットの無いやつはお引き取り願おうか」

俺はその3人の前に立ちふさがった

「またあなたですか……こりませんね」

琢磨とかいう奴があきれながら言った

「お前なんかにあいつらのライブを邪魔はさせない」

「それはファイズとしてですか?」

「昨日までだったらそうだったかもしれないな……けどもう違う…こんな俺でも、必要だと言ってくれたあいつらのために……いや、」

「Ｒｏｓｅｌｉａの６人目のメンバー、乾　一也として、あいつらを守る!!」

Ｒｏｓｅｌｉａ…　友希那が考えたバンドの名前だ
バラのｒｏｓｅと椿のｃａｍｅｌｉａを合わせたものらしい

イメージは青い薔薇、その花言葉は・・・・『不可能を成し遂げる』

なら、俺もやってやろうじゃないか！

「いいでしょう。昨日のように叩きのめして上げましょう」

そういいながら、メガネをあげると昨日のようにオルフェノクに姿を変えた

そして、その後ろにいた2人も同じようにオルフェノクになった

《５・５・５》

《ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ…》

「変身!!」

《ｃｏｍｐｌｅｔｅ》

前と同じ3対1。けど、俺はやらなきゃいけない

手首を振り、拳をかまえる

「こい！」

リサｓｉｄｅ

「うわぁ……すごい盛り上がり！」

控え室で、ステージの様子を見ながらあこが言った

「わ、私……大丈夫かな……？」

「大丈夫だよ、りんりん！あれだけ練習したんだからさ！」

「う、うん……そうだね」

相変わらず燐子は緊張してるなぁ……私も人のこと言えないけど

それにしても…

「一也……来ないな……」
「リサ、もうすぐ本番よ。集中して」
「あ、う、うん」

やっぱり、友希那と紗夜は何度もステージに立ってるだけあって緊張してないな

「……一也はきっと来るわ。だから、私たちは最高の演奏をするだけよ」
「友希那……うんっ！」

確かにそうだよね。あいつはきっと来る！

一也ｓｉｄｅ
「なかなかしぶといですね」
「そう簡単に通させるかよ…」
一旦距離を取り、相手と対立する

３人の猛攻を交わしながら攻撃をするが、やはり数の差が出てくる
何か方法は……

その時――――

「ん？」
俺の肩に何かがあった。そして、足元には腕時計のようなものが落ちていた
「これは……？」

それを持ち上げながら、投げられた方を見てみると、その場から立ち去る男の姿が見えた
でも、なんだ……？この感じ……どこかであったような……？

「よそ見してるとは余裕だな！」
「おっと」

オルフェノクが攻撃してきたが、それを交わす
考えるのは後だ。今はこの状況を打破するだけだ
それを腕に付け、ミッションメモリをベルトに差し込む
《ｃｏｍｐｌｅｔｅ》
すると胸の装甲が動き、コアのようなものが出てきた。そして、フォトンブラッドが赤から銀に変わった
「なんです……？」
「こけ脅しだぁぁぁ！」
そう言ってセンチピードオルフェノク以外の２人がこちらに走ってきた
《ｒｅａｄｙ》
ファイズショットにミッションメモリを差し込んで拳をかまえる
《ｓｔａｒｔ　ｕｐ》

ボタンを押した瞬間から俺の体を中心にソニックブームが起こった

「はぁ！」

刹那――

《ｔｉｍｅ　ｏｕｔ》

「「ぐぁぁぁぁぁぁ！」」

装甲が元に戻ると同時に2体のオルフェノクが灰になった

何が起こったのか説明すると、相手の目にも止まらぬ速さで攻撃をした。ただそれだけの事だ

「ぐっ……覚えていなさい！」

どうやら、あいつだけは間一髪のところで交わしたらしい

そう言って、人間に戻ったセンチピードオルフェノクも肩を抑えて何処かへ逃げていった

「あ、ライブ！」

俺は変身を解除して、ライブハウスに走った

「ワァァァ！」
「友希那ーーーー！」

俺がライブハウスに着くとすごい盛り上がりだった
そして、そのステージに立っていたのは……
「次が最後の曲になります。それでは聞いてください……『ＢＬＯＣＫ　ＳＨＯＵＴ』」
「リサ…友希那…」

曲が始まり、更に会場は盛り上がった。
リサ達が初めてセッションした時と同じ……いや、それ以上のパフォーマンスを彼女達はした
「やっぱ、スゲェーな。あいつら」

会場の最後尾で俺は彼女達の演奏に聞き入っていた

某所――――

「う、うっうっ……」
琢磨　一郎がとある女性の膝の上で泣いていた
「もう……考えなしに戦いを挑むからよ」
「あの2人はなかなかの実力者です。行けると思ったんですよぉぉ」
「私達の目的はファイズを倒す事じゃないでしょ？」
「はいぃ……」
「可能性のある子を奪えばいい。それだけでしょ。もっと頭を使わないと」

「例えば、あのバンドをバラバラにする。とかね」

そう言った女性が不気味に笑った。

この先、Ｒｏｓｅｌｉａに訪れる悲劇を俺達は知るはずも無かった……

第８話　秘密と傷

Ｒｏｓｅｌｉａの初ライブも無事に終わって、今日から練習再開！

なんだけどさ……

「私はあなたをＲｏｓｅｌｉａのメンバーと認めていませんわ！」

……どうしてこうなるの!?

第８話　　秘密と傷

スタジオに入った時に、紗夜が一也に向けて言った言葉。
一也もメンバーになるから、雰囲気が悪くならないよう、紗夜とも少しは仲良くしようとしてたんだと思う。多分…
で、声をかけたんだけど返ってきたのが、さっきの言葉。
まぁ、紗夜の性格からして、バンドにメリットの無い一也が入るのは気がよくないのだろうね……

んー、どうすれば良いかな…？

一也Ｓｉｄｅ

「今日も何もなしか…」
俺はいつものように街を見回っていた

「「あ」」

すると、氷川と偶然会ってしまった
こいつ、俺に敵意むき出しだしな。そのままスルーしようとした時だった

「ッ！よけろ！」
「え？」
氷川の頭を庇いながら攻撃を交わした
粉塵が収まるとそこには案の定、オルフェノクが立っていた

「その女を渡せ」
「それで、はいそうですかって渡すと思うか？」
「なら、力ずくだ！」

そう言って、こちらに向かって走り出した
《５・５・５》
《ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ…》
「変身！」
《ｃｏｍｐｌｅｔｅ》
「はぁ！」
変身し終わると俺はオルフェノクに殴り掛かった
そして、そのまま拳を次々と打ち込んでいく

「はぁ！」
「ぐぁ！」
《ｒａｄｙ…》
《ｅｘｃｅｅｄ　ｃｈａｒｇｅ》
パンチでオルフェノクを吹き飛ばし、ある程度距離を取る。
足にファイズポインターを付け、膝に肘を起きベルトからフォトンブラッドが行くのを待つ

「う、うぅぅ…」
オルフェノクは俺が攻撃した箇所を抑えながらフラフラしている
あと、一撃で決めれる
足までフォトンブラッドが行くのを確認し、オルフェノクに向かって駆け出す
「はぁぁぁぁぁ!」
「ぐぁぁぁぁぁ」
後ろで爆発が起こる。攻撃が完全に決まった……
と思っていた
「まだ……だ!」
「何?」
なんとオルフェノクは体から青い炎を上げながらも、氷川に向かって攻撃を仕掛けようとしていた

「チッ！」
「あああああああああぁぁぁ！」
オルフェノクが雄叫びを上げながら、氷川に向かっていく
俺は氷川の前に立った
「ぐっ……はぁあ！」
俺は攻撃を喰らいながらもトドメの一撃を食らわした
今度は確実に効いたらしく、オルフェノクは灰になった
「ぐっ……」
変身を解除して、思わず膝をつく。ああしないと氷川に危害が及ぶからこうするしか無かったが、攻撃をもろに食らった。

「大丈夫ですか!?」

氷川が俺に駆け寄ってきた

「…あぁ……これくらい…なんとも…ない」

「そう言っても怪我してるじゃないですか」

「…これくらい何とも…」

そう言いながら立つもふらついて、近くの壁に手を置いた

「これくらいって……」

戦っていれば、これくらいの事はたまにある。しかし、これを氷川はよしとしなかった

「…うちに来てください。そこで少しですが、怪我の治療をします」

そう言われて、俺は氷川の家に連れてこられた

氷川は黙って、俺の怪我をした所を手当してくれた

「……」

「……」

沈黙が続く。元々仲が悪く、俺も何を話したらいいか分からわない。恐らく、こいつも同じ理由だろう

「……あなたは……いつもあんなのと戦っているの？」

手当をしながら、氷川が俺に訪ねてきた

「……まぁな」

「怖いとは思わないの？あなたも私と同じ高校生でしょ？」

「……俺がやらないと誰かが死ぬ。だから……」

「そう……」

「「……」」

再び沈黙が訪れる。

今度は俺から声をかけるか…

「……前から気になってたんだけどさ、どうしてそこまでギターにこだわるんだ？」

氷川の音楽に対する気持ちはかなりのものだ。ここまで必死になる理由が知りたかった

「そ、それは……」

「……もしかして、日菜の事か？」

「！」

手当の手を止めこちらの顔を見てきた。

日菜とゆうのは、氷川の双子の妹の事であり、俺とリサと同じクラスの人間だ。

何でもすぐ出来る天才、といえば一番しっくり来るかもしれない

表情を見たところ、恐らく正解だろう。でも、これ以上の事は聞かない方が良いかもしれない

誰にだって触れられたく無いことはあるんだから……

俺にもあるように……

「手当、ありがとな」

「いえ……」

その後はお互い何も話さず、その間に、手当が終わり、長居する理由もないので家を出た

「……私、あなたの事を勘違いしてました」

「は？」

「私はあなたの事をただの戦闘狂だと思ってたわ……でも、本当は違う。あなたは誰よりも優しくて、強い」

優しいくて強い、か…

そんな事を言ってくれる奴がでてくるとはな

「……なら、敵視するの辞めてくれるか？」

「少しはね」

その時、俺には紗夜が微笑んだように見えた

翌日――

「それでさー、その時モカがね……」

いつも通り俺と友希那とリサで学校に向かっていた
「あら、みなさん」
「あ、紗夜。おはよう」
偶然、紗夜と出会った
すると、こっちを見てこっちに向かってきた
「乾さん、寝癖ついてるわよ」
「いいんだよ。これくらい」
「いいわけないでしょ。ちゃんと直してください」
「……学校ついて覚えてたらな」
「ちゃんとやってくださいよ」
「はいはい」
「ねぇ、２人とも仲良くなってない？」
横で俺たちのやり取りを見ていたリサが言った

「「そんな訳無いだろ（でしょ）！」」

第９話　　謎の戦士

「文化祭？」
「はい……この週末にあるんです…よかったら……」

バンドの練習も終わり、次の予定を話している時だった
燐子と紗夜は、文化祭があるから出れないそうだ

「私はいいわ」
「あこは行く！リサ姉と一也さんも来るでしょ？」
「うんっ。花咲川がどんなとこか行ってみたかったんだー」

いつものように流す友希那。そして、それとは対象的に行く気満々のリサとあこ。

「俺はいい」
「「ええ！何で!?」」

リサとあこが口を揃えて言った
正直な話、人混みはあまり好きじゃない
それに、オルフェノクが出た時にすぐ対応出来ないからな

「オルフェノクが出たら対応出来ないだろ？」
「大丈夫だって。オルフェノクも文化祭の日くらい休んでるって」
「なんだよ。その根拠のない話」
「えー、いいじゃん。行こうよー！」
無理やりにでも連れていきたいのか俺の肩に手を置いて頭をブンブン振らしてくる
「あー！もう、分かった。行く。行くからやめろ！」
「やったね、リサ姉！」
「うん！」

俺が渋々承諾したのを見て2人がハイタッチをする。そして、友希那と紗夜は、そんな2人を呆れ顔で見ていた

第９話　　謎の戦士

文化祭当日――――

「うわーーー!すごい人!」

花咲川の校門を通ると、まだ開始時間でもないのにかなりの人がいた

「ねぇ、どこから回る?」

「あ!あこ、ここ行ってみたい!」

相変わらずこの２人はテンションが高い。そんな２人の後ろを着いて歩いていると見覚えのある車が止まっていた

確かあれは、山吹ベーカリーの?そう言えば、沙綾がここの生徒だっけ?

沙綾、と言うのは、この街のパン屋の子だ。放課後や休みの日によく店番をしているので、よくあっている

恐らく、ここの売店で出すのだろうと思ったが、その本人が見えない。

そして、おじさんとねこ耳みたいな髪型の子が何か深刻そうな顔で話していた

何かあったのか？

「おじさん」
「おぉ、一也君か。君も来てたのか」

俺はその女子が離れた後、おじさんに話かけた
「何かあったんですか？」
「んー、実はね、うちの妻が倒れてね」
「え…」
「あ、いや、大した事は無いんだよ。少し貧血気味でね。それで沙綾が着いて行くって聞かなくて」
「そうだったんですか…」
「あ、そうだ。もしよかったら一也君迎えに行ってくれないか？私も親として、娘には文化祭を楽しんで欲しいし」
「そういう事なら」

俺はリサに少し抜けるとメールを打って、病院に向かった

病院前――――

オートバジンを降りて病院の前で待っていると、沙綾がイヤホンをして走ってきた

「一也さん？」

「文化祭行くんだろ？」

「はい……私、急がないと！」

「分かった。しっかり掴まっとけよ」

そう言いながら、俺はヘルメットを投げた

「はい！」

抜け道などを使い、花咲川学園に向かった。
あと少しで着くという所だった
「フフフ」
「こんな時に！」
道の真ん中にクロコダイルオルフェノクが立ちふさがった
「そんな…！」
「沙綾、どっか隠れてろ！」
《５・５・５》
《ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ…》
「変身！」
《ｃｏｍｐｌｅｔｅ》
《ｒｅａｄｙ》

オートバジンのハンドル部分にミッションメモリーをセットし抜き取った
オートバジンに収納されているファイズエッジだ

「はぁぁぁぁ！」

剣できりかかった。が、

「そんなもんか？」
「嘘だろ？」

相手は避ける仕草もなく、攻撃を受け止めた。しかもダメージを受けた気配も無い
「そいつを置いて、消えろ」
「それで、はいそうですか
、ってすると思うか？」
「ならば死ね！」
そう言うと、こちらに向かって走り出した

普通の攻撃が聞かないなら、一撃で仕留める！

《ｅｘｅｅｄ　ｃｈａｒｇｅ》

ファイズフォンを開き、エンターキーを押す

「はぁ！」

腕までフォトンブラッドがいくのを確認し、切り上げるようにファイズエッジを上げる

すると、地面を伝いクロコダイルオルフェノクに当たると空中で動きを封じ込めた

「はぁぁぁぁ！」

そして、Φを書くように斬撃を決める

「あぁぁぁぁ！」

「ふぅ……」

「一也さん！後ろ！」
「は？」

俺が沙綾の呼びかけで振り返ってみると、そこには別のオルフェノクが立っていた
「ふん！」
「ぐはっ」
いきなり攻撃された事もあり、攻撃をもろに受けてしまった
そして、オルフェノクは、俺に見向きもせず、紗綾に向かっていった
このままだと…！

そう思った時だった

「はっ！」

「えっ？」

突然、沙綾の前にまた、別のオルフェノクが立ち塞がり、襲おうとしたオルフェノクの体に剣を突き刺した

そして、そこから青い炎があがり灰になった

そいつは、俺を見た後、走り去っていった

「今のは……？」

その後、俺は沙綾を送り届け、紗綾がバンド、Ｐｏｐｐｉｎｐａｒｔｙにドラムとし

て参加し、ライブは成功を収めた

けど、俺はあの馬みたいなオルフェノクがずっと気になっていた。

一体、あのオルフェノクはなにものなんだ？

数日後――――

「ふぁぁぁ」

あくびをしながら、朝刊を取りに外へ出た

「ん？」

俺は、見覚えのないアタッシュケースがポストの下に置かれていることに気付いた
でも、それは、俺が持つファイズギアが入っていたものによく似ていた

「……開けてみるか…」

家の中に持ち帰り、ゆっくりとケースを開ける。

「これは……」

その中には、ファイズドライバーとよく似たドライバーとユーザーズガイドが入っていた

そこには、ドライバーの名前も書いてあった

その名前は――

「オーガ……ドライバー……？」

第１０話　　新たなライダー

「……」
「どうしたの？難しい顔して？」
「いや、別に…」
　昼休み、俺は今朝届けられていたベルトの事を考えていた
　ファイズギアもこんな感じで届けられたが、何故、二つ目のベルトが来たのか全く分からなかった
　この前のファイズアクセルといい、文化祭の時のオルフェノクといい、謎めいたことばかりだ
「いらっしゃいませー、って一也さんか」

「久しぶりに来たな」

スタジオに行く途中、俺は山吹ベーカリーに立ち寄ると沙綾が店番をしていた
おじさんが文化祭の時のお礼としてパンをサービスしてくれるのだ

「最近、来てくれないですけど…お昼どうしてるんですか？」
「……いろいろあるんだよ」

前まではほぼ毎日昼飯として買って行っていたが、最近はリサが弁当を作っているので、昼飯を買う必要がなくなった

それを聞いて、リサはニヤニヤしているが…

「山吹さん、パン焼けたよ」
「あ、ありがとう。じゃあ、ついでに並べてくれる？」
「うん、いいよ」

パンを選んでいると、山吹ベーカリーのエプロンを着た見覚えの無い男子が立っていた

見た感じ、俺と同じくらいか？

「あ、一也さんは初めて会いましたよね。今、うちでアルバイトしている、木場　勇介。」

「初めまして、木場　勇介です」

「あ、ああ、どうも…」

勇介ｓｉｄｅ

「それじゃあ、行ってくるね～」

店から山吹さんが出てきた。
今日はポピパの練習日。俺もたまに見学に行ってるんだ

談笑しながら市ヶ谷さんの蔵に向かっていると、男の人が道の真ん中に立ち塞がっていた
「今度は、邪魔者が居ないようだな」
「そうとも限らないよ」
「何？」
「……下がってて、山吹さん」
「うん……無理、しないでね」
「うん」

山吹さんが数歩下がるのを確認すると、俺は体に力を込めた
すると、体が灰色の馬のような怪人に変化する
これが俺のもう一つの姿、ホースオルフェノク

「貴様か、オルフェノクを狩るオルフェノクというのは」
「そうだ。彼女に手出しはさせない」
「そうか……なら、お前ごと連れていくまでだ！」

そう言い終わると、剣を構えこちらに向かってくる

「はぁあ！」
「ふん！」

俺を剣を使い応戦する。
剣と剣がぶつかり合う中、隙を見つけ、懐に向けて剣を振った
攻撃が決まった……そう思った

しかし……

「その程度かぁ！」
「ぐはっ」

攻撃をした所には傷も付か無かった。相手は俺の剣を持ち、さらに、腹に向かって蹴りを決められ、後ろに吹き飛んでしまった
思っていた以上に、体が硬かった。ダメージをあたえるどころかむしろ、こっちがダメージを受け、人間の姿にもどってしまった

「勇介!」
その状況を見て、山吹さんが駆け寄ってきた
「山吹さん…来ちゃだめだ…」
「でも!」

彼女を守るためにも、力を振り絞り立ち上がる

「そんなもんか?」
「ッ……!」
クロコダイルオルフェノクが1歩1歩近づいてくる
ダメージもかなり受け、状況としては最悪だ

その時――――

《ｓｉｎｇｌｅｍｏｄｅ》

「ん？」

俺の後ろから光弾を誰かが撃った。

そこには、銀色の戦士が使う携帯を持った男が立っていた

確か、あの人は数日前に店に来てた……まさか、彼が……

一也ｓｉｄｅ

「間一髪だな…」

「一也さん…！」

紗綾から連絡を貰って、急いで来たが、間一髪だった。
沙綾を襲ったオルフェノクは文化祭の時のクロコダイルオルフェノクだった。
こいつは確かに倒したはず…
それと、木場とかいうやつ……生身で耐えたとは思えない…まさか……

「どうした？かかってこないのか？」
いや、考えるのは後か…
「まぁ、こいつを試すのにはちょうどいいか…」
「何？」

俺はいつも使うアタッシュケースをどかし、この前届けられたオーガドライバーを取り出した

《０・０・０》
「変身！」
いつもと違うコードを入力し、ベルトに差し込んだ

が……

《Ｅｒｒｏｒ》
「は?うわっ!」

まるで、ベルトが拒否反応を示すように離れ、その反動で俺も吹っ飛ばされた
「どうなってんだ!?」
「はぁっ!」
「おっと!」
呆気に取られていると向こう側が攻撃をしてきたがそれを交わす
使えないなら、いつも通りやるしかないか
いつもと同じ銀色のベルトを取り出し腰に巻く
《５・５・５》
《ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ…》
「変身!」
《ｃｏｍｐｌｅｔｅ》

「はぁっ！」
手首のスナップを聞かせ、拳を握り相手に向かっていく
「てめぇ、何で生きてんだ!?」
「蘇りの術を使ったのさ。お前を倒すためになぁ！」
「ぐっ」
確実に前より強くなってる。
そして、よく見ると姿も少し変わっていた。
これは、一人じゃやばいかもな…
勇介ｓａｉｄ
彼は果敢に戦っている。けど、少しずつ押され始めていた

俺には無いも出来ないのか……！

そして、俺はそんな姿を見ながら、無意識のうちに拳を握っていた

「勇介…」

山吹さんが何かを察したように俺に声を掛けた

「分かってる……でも……」

次の言葉を言いかけた時、地面に転がっているベルトが目に入った

あれを使えば……！

そう思った時には体はベルトを取ろうと動いていた…

「はぁ……はぁ……」

「以前の借り返さしてもらう！」

「そうはさせない！」

「何!?」

突然上がった俺の声に反応して２人がこちらを向く

「お前！」

彼が僕がベルトを付けていることに気がつき声を上げたけど、そんな事は気にせず、コードを入力した

《０・０・０》

《ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ……》

「変身!!」

《ｃｏｍｐｌｅｔｅ》

俺の姿が黒いボディに金のラインが入った戦士に変わった

《ｒａｄｙ》

腰に付いていた剣をオルフェノクに向けて構えた

「こい！」勇介ｓａｉｄ

彼は果敢に戦っている。けど、少しずつ押され始めていた
そして、無意識のうちに拳を握っていた
「勇介…」
山吹さんが何かを察したように俺に声を掛けた
「分かってる……でも……」
次の言葉を言いかけた時、地面に転がっているベルトが目に入った
あれを使えば……！
そう思った時には体はベルトを取ろうと動いていた…

「はぁ……はぁ……」
「以前の借り返さしてもらう！」
「そうはさせない！」
「何!?」
突然上がった俺の声に反応して２人がこちらを向く

「お前！」
彼が僕がベルトを付けていることに気がつき声を上げたけど、そんな事は気にせず、コードを入力した
《０・０・０》
《ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ……》
「変身!!」
《ｃｏｍｐｌｅｔｅ》
俺の姿が黒いボディに金のラインが入った戦士に変わった
《ｒａｄｙ》
腰に付いていた剣をオルフェノクに向けて構えた
「こい!!」

第１１話　　戦士の決意

「こい！」
木場という男がオーガに変身した
あいつ…やっぱり……

「はぁぁぁ！」
「ぐっ…！」

そんな事を考えている間剣を振るい、オルフェノクに攻撃を仕掛けていた
ファイズと桁違いのパワーをもつオーガ。攻撃は効いているようだ

「な、何だ、こいつは?!まだベルトがあるなんて聞いてないぞ！」
クロコダイルも突如現れた戦士に同様を隠せていなかった
「これで終わりだ！」
《ｅｘｃｅｅｄ　ｃｈａｒｇｅ》

金色のフォトンブラッドがベルトから右手に流れていく
そして、金色の刃となった
「はァァァァ！」
「ぐぁぁぁぁぁぁぁ！」
青い炎を上げ、オルフェノクが灰になる。そして、そこには金色の『Ω』の文字が浮かび上がっていた

「勇介！」
変身を解いたアイツの所に沙綾が駆け寄って行った。が…
「……良かった…無…事で……」
「勇介！」
「おいおい…！」
その男はその場で倒れてしまった…

「……ありがとうございます。一也さん…」
「……あぁ」

とりあえず、俺の家まで運んでソファに寝かせた
「……」
「……」
沙綾もどこかぎこちない。
文化祭の時にオルフェノクを倒していた俺を見ているからか、木場を殺さないか心配しているんだろう…

「……お前は……こいつがオルフェノクだったって知っていたのか？」
「……はい……文化祭前くらいに１度襲われかけた時に助けてくれたんです…」
「そうか……」
「一也さん！勇介はいい奴なんです。だから…だから……！」

沙綾の目に涙が溜まっていた
でも……

「……お前、今日はもう帰れ」
「一也さ…」
「後は俺が決める」

「う…ここは?」
「俺の家だ」
木場が目を覚ました
「お前、オルフェノクだったんだな」

「……そうだとしたら、君は俺を倒すのか？」
「……一つ聞きたい、お前は何で、人間を守る？」

「……大切な人を守るために理由なんて必要ないだろ？」
「！」
「じゃあね」
そう言って、木場は部屋から出ていった
理由なんて必要ない、か…

第１１話　　戦士の決意

勇介ｓｉｄｅ

「……」
「勇介？」
「ん？どうかした？」
「いや、なんか最近ぼーっとしてる事多いなーと思って」
「そうかな？」

そう言って、笑って見せた
彼にあって数日、彼が襲ってくるわけでもなく、何事もない日々が続いていた

「…もしかして……一也さんのこと……？」
「……うん」
「勇介はなにもしてないじゃん……それなのに、オルフェノクだって事で……」

俺はそういった山吹さんの頭を撫でた

「そう言ってくれると俺も嬉しいな。けど、彼にも彼なりの正義がある」

「でも！」

「勇介君、配達頼めるかい？」

「あ、はい！」

山吹さんが何かを言いかけた時、厨房の方からおじさんの声が響いた

「じゃ、配達行ってくるね」

「勇介……」

「あのベルトがあれば、俺も……」

配達の帰り道、そう呟いた

あのベルトの力は強力だ。多分俺のオルフェノク状態よりも強い

けど、1番いいのは、みんなを守れる事だ

今までは、ｐｏｐｐｉｎ，ｐａｒｔｙのみんなに危害が及ぶことは無かった

けど、最近になって山吹さんが襲われた。噂では音楽関係者が狙われているらしい

つまり、いつかは襲われる可能性が高いという事だ

オルフェノクの力を使えば、守る事はできる。けど、俺がオルフェノクだと分かった時、彼女達が受け入れてくれるかどうか…

「俺も……力が欲しい…」

「なら、俺達の仲間になるか？」

「!?」

振り返ってみると、そこにはこの前のオルフェノクが立っていた

「お前もオルフェノクだろ?なぜ、下等種族を守る?俺達の仲間になって、この世界を手に入れようじゃないか」

「…もし、それを断ったら?」

「なら、死あるのみだ。この前の女と共に、な!」

そう言い切るとこちらに向かって来た

「そうはさせない!」

俺もオルフェノクとなり、戦闘態勢をとる。が、

「はぁあ!」

「ぐっ!」

俺の拳より、アイツの拳の方が早く届いた

こいつ…前より強くなってる…

「前は予想外の事が起きたが今回はそうは行かないぞ。前回の借り、しっかり変えさせてもらうぞ！」

その後も俺が攻撃をする暇もなく、一方的に攻撃を受けた

「オラァ！」

「ぐはっ！」

そして遂に、人間態に戻ってしまった

「終わりだ」

そう言って、俺に向かって剣を振り下ろした……

が……

「ったく、世話のかかるヤツだな」

「あん？」

後ろからバイクの走行音が響き、そのまま、クロコダイルオルフェノクを吹き飛ばした

そのまま、俺の横で止まり、ヘルメットを外した。やはり、彼だった。

そして、俺の前にあのアタッシュケースを落とした

「それを使え」
「いいのかい？これは……」
「勘違いするな。これはアイツを倒すのに1番手っ取り早いからだ」
「…何はともあれ、ありがとう」
「ふん」

そういった彼は少し笑っているように見えた
彼はまだ、俺の事を信頼してくれた訳では無さそうだ
けど、俺の守りたいって気持ちだけは理解してくれたのかな？
俺に取っては、それだけでも、嬉しかった

「行くぞ、木場！」
「ああ、乾くん！」

二人がベルトを付ける

《５・５・５》

《０・０・０》

それぞれが、変身コードを入力する

そして、あの言葉を叫んだ

「「変身!!」」

ｃｏｍｐｌｅｔｅ

二人の姿が変わった

「さぁ、今度こそ、倒させてもらうぞ」

《ＢＧＭ　ｐｅｏｐｌｅ　ｉｓ　ｎｏ　ｎａｍｅ》

ｒａｄｙ

剣を構え、オルフェノクに向かって行く

「はぁ！」

「やっ！」

「ぐっ…！」

攻撃を交わし、剣で切りつけていく

やっぱり、この力は凄い…！

「クソがァ！」

「はっ！」

相手の剣撃が来るが、剣を上に上げそれを防ぐ。防御力とパワーが高いオーガ。オルフェノクの時とは違い、しっかりと攻撃を受け止め、そして、

「はぁ！」

「なっ！」

乾くんが剣と腕の隙間からフェンシングのように剣で相手の頭を突いた
流石にクロコダイルオルフェノクも後ずさりをした
確実にこちらが押している！

「無駄だぞ…俺以外でも、強いオルフェノクはたくさんいる。俺を倒したところで……」

「そんなもん知るか。来たところで返り討ちにしてやる」
「もう誰も傷つけたりさせない！」
「貴様らァ…」

乾くんが足にファイズポインターを付ける

「決めるぞ、木場！」
「うん！」
ｅｘｃｅｅｄ　ｃｈａｒｇｅ

二人の足に赤と金のフォトンブラッドが流れていく

「はぁ！」

高く飛び上がり、ファイズポインターから赤い楔を放つ

それがクロコダイルを捉え動きを封じた

「はぁぁぁぁ！」

「うぉぉぉぉ！」

それに向かって二人同時に蹴りを決めた

「あァァァァァあ！」

着地同時に後ろでΩとΦの記号が浮かび、青い炎上げてオルフェノクが灰になった

「やったね」

「あぁ」

夜――――

???ｓｉｄｅ

「はぁ…はぁ…」

１体のオルフェノクが何かから逃げていた

「何だよ…あいつ……」

息を切らし、膝に手を置き体を休めようとした

しかし……

「逃げれると思ったか？」

「ヒィ！」

前から声がする。その正体は彼を追い、オルフェノクが最も恐れる存在…
そんなものはこの世界でただ一つ

「3人もライダーがいるなんて聞いてないぞ…！」
「3人？まだいたのか……まぁいい、お前が死ぬことに変わりはない」
「うわぁぁぁ！」

その戦士に背を向け、オルフェノクが一目散に逃げ出す

「どうしようもないやつだな」
《ｅｘｃｅｅｄ　ｃｈａｒｇｅ…》
「がっ…！」
手にもつ武器のレバーを引き、光線を放つとオルフェノクの体に黄色いラインが入り動きを止めた

「やめっ！」
「はぁ！」
逆手に持った剣を構え、オルフェノクに突撃して行った
「うアアアアアア！」
その戦士の後ろで青い炎とＸの記号が浮かぶ
「ふん」
変身解除し、その男はその場を後にし、こう呟いた
「オルフェノクは全員、俺が倒してやる……！」

特別編　ベストマッチ!!

《ｅｘｃｅｅｄ　ｃｈａｒｇｅ》
「はぁぁぁぁ！」
「あぁぁぁぁぁぁ！」

クリムゾンスマッシュをラビットオルフェノクに決めると、Φの紋章が浮かび灰になった

「帰るか」
変身を解除し、オートバジンに跨り、その場を後にした

しかし、俺はこの時気づいていなかった…

「よし!ウサギの成分ゲット!」

「それで、さっきのがファイズか……彼の成分も採取しないとな!」

俺が去った後、一人の男がそこに来ていた事を……

特別編　　ベストマッチ!!

「ねぇねぇリサ姉！これからりんりんと新しく出来た喫茶店行くんだけど、リサ姉もいかない？」

Ｒｏｓｅｌｉａの練習後、あこがリサに話しかけていた

「あー、ごめんね。今日、これからバイトなんだ」
「そっかー、じゃあ、一也さん！どうですか？」
「んー……まぁ、する事ないし、いいぞ」
「やったぁ！」

という訳で、俺たちはその喫茶店に行く事になった

「それで、なんて名前の喫茶店なんだ？」
「ｎａｓｃｉｔａって言うらしいです」
「へぇ…」

そんな話をしながら3人で歩いている時だった

「グァァァアォ！」
「!?」

突如、俺たちの前に上半身が青い怪人が現れた
「オルフェノク…？」
「いや、違う！」
オルフェノクの体の色は灰色のみで、目の前に現れた怪人には当てはまらない

「お前ら、どっか隠れてろ」
《５・５・５》
《ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ…》

「変身！」
《ｃｏｍｐｌｅｔｅ》
「はぁ！」
俺はその怪人に向かっていた。が…
「グォォォォ！」
「ぐっ！」
その肥大化した拳によって吹っ飛ばされてしまった
「乾さん！」
それを見て、燐子が物陰から飛び出してきてしまった
「グァァァア！」

そして、それを見て怪人が燐子に向かって行った

「えっ…」

「燐子!」

突然のことで燐子も固まってしまった

燐子に怪人が迫る。しかし、このままじゃ間に合わない！

その時…

カチカチ…

何かの音がした。そして…

「よっと!」

「何!?」

怪人の拳が空を切る。燐子がその場から消えていた

当たりを見回す。そして、上を見上げると、男が燐子を抱きかかえて、飛んでいた。

「りんりん！」
「あこちゃん…」
「大丈夫？怪我ない？」

あこが燐子に駆け寄った。見たところ怪我は無さそうだ
それと、あの男…何者だ？

「お嬢さん、少し下がっててもらえるかな？」
「え？」

その男が一歩前に出て、怪人と向き合う

「さぁ！実験をはじめようか！」

懐から何かを取り出し、腹に付け、赤と青のボトルのようなものを振り始めた

《ラビット!》
《タンク!》
《ベストマッチ!!》
　そして、ベルトにそれを差し込み、ベルトに付いてあるレバーを回す
　すると、ベルトから管が出現し、その男の前に赤と青の半身が成形された
《Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ?》
「変身!!」
　二つの半身が男を包むように合体し、蒸気が噴出した
《鋼のムーンサルト!》
《ラビット・タンク!》
《イェーイ!》
「嘘!」
「変身……した?」
　あこと燐子も驚いていた

「勝利の法則は決まった！」

そいつはゆっくり怪人の周りを見ながら、俺の所にやってきた

「お前…一体何者だ？」

「今はそんなことどうでも良いでしょ？それより、アイツを倒そう！」

「……言われなくても」

《ｒａｄｙ…》

「はっ」

ファイズエッジとドリルのような剣を構えた

「はぁ！」

俺がファイズエッジで切りつけた後、怪人がその場からにげようとした

「ほっ！」

しかし、その戦士は足のバネを使い、怪人の上を飛び越え、先回りし切りつけた

「グゥゥゥ……」

二人の攻撃で怪人を追い詰めた

「これでフィニッシュだ!」

「あぁ!」

俺はエンターキーを押し、その戦士はレバーを回した

《ｅｘｃｅｅｄ　ｃｈａｒｇｅ…》

フォトンブラッドが足に流れていく。そして、そいつは…

「ちょっと、待っててね」

「はぁ!?」

いきなり、後ろに走り出し、地面に穴を開けた

「嘘だろ!?」

俺が驚いていると、グラフの様なものが出現し、怪人の動きを止めた

「はぁ！」

そして、地面から出てくるのと同時に俺も飛び上がった

《ｒｅａｄｙ　ｇｏ！》

《ボルテックフィニッシュ！》

《イェーイ！》

「「はぁぁぁぁ！」」

「ぐぁぁぁぁぁぁ！」

二人のライダーキックが決まり、緑の爆炎を上げて怪人が倒れた

「よっと」

そいつは変身に使ったものとは別の透明なボトルを取り出し、何かを吸収した

そして、その場には人間が倒れていた

「お前……一体…？」

「あぁ、忘れてた。君の成分も貰いに来たんだった」

「は？」
「じゃあ、頂きます」

同じようなものをかざし、ファイズのスーツが粒子となって、俺の変身が解かれた

「じゃ、またね～」
「おい！」

そいつは何も言わずにその場から去ろうとした。しかし、肩を掴み、俺は無理やり呼び止めた

「俺の質問に答えろ。お前は何者だ？」
「俺は桐生　戦兎。またの名を仮面ライダービルド」
「ビルド？」
「うん、作る、形成するって意味のビルドだ」
「お前も仮面ライダーなのか？」
「以後、お見知り置きを。ｓｅｅ　ｙｏｕ！」

そして、その男、桐生　戦兎はその場を去っていった

「なんか凄かったですね！一也さん！」
「あ、あぁ…」
完全に振り回させた気分だがな
「りんりんもそう思ったでしょ？」
「……」
「燐子？」
あこが質問しても燐子には応答がなかった。そして、こう言った
「あの人……かっこよかった…！」

「嘘だろ…」

そう言った燐子の顔は完全に恋した乙女の表情だった……

第１２話　勇気を力に

「きやあああ！」

今日も街で悲鳴が聞こえる

本当、最近よく暴れるようになったな…

駆けつけると、オルフェノクが宅配便のトラックを襲撃し、辺り１面に積荷が落ちていた

そして、近くにいたグループに襲いかかろうとしていた

って、あの灰色の髪の後ろ姿は…

「モカ？」

「先輩？何で…」

「はっ！」
「チッ！」

モカが俺に問い掛けようとした時にもオルフェノクが襲ってきたが、生身のままで蹴り飛ばす
オルフェノクもまさか生身で攻撃してくるとは思わず、思わず仰け反ってしまい、俺達との間に間合いが出来た

「説明は後だ！下がってろ」
「は、はい！」
《５・５・５》
《ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ……》

そういった後、隠れているのを横目で見ながら、ベルトを付け、コードを入れる

「変身！」
《ｃｏｍｐｌｅｔｅ》

手首のスナップを効かせ、拳を構えた

が……

「チッ……」

「あ、おい！」

オルフェノクは戦闘することもなく背中の翼を翻し、その場を去った

一体何だったんだ…？

「……これは酷いな…」

「そうだね…」

俺が変身を解いたあと、木場が騒ぎを聞き付けてやってきた

何故、オルフェノクが宅配便のトラックを襲ったのは分からないが、そこら中に荷物が散乱していた

「あれ？」

木場が何かに気づいたのか、一つの荷物に寄っていき、それを持ち上げて俺に見せた

「これ、君宛てだよ」

「は？」

確かに、宛名は俺宛てだった。

「差出人は？」

「……これ、多分偽名だね。差出人の住所がめちゃくちゃだ」

「そうか……」

木場から荷物を受け取ると、それなりの重さがあった

「なんだ……？」

俺はその場で箱を開けた。すると出てきたのは、俺達の持つアタッシュケースよりも

一回り小さいアタッシュケースが出てきた

「これは……」

「新しい…ベルト？」

ユーザーズガイドにはデルタギアと書いてあった

「どうするかな…」

「せ、先輩？今のは……？」

考えていると、モカが話しかけてきた。こうなった以上少しは事情を説明しないとな…

「お前ら、怪我ないか？」

「は、はい…」

モカの後ろに隠れていた茶髪の女子が答えた

「それより、アンタ一体何者なの？」
「おい、蘭。初対面の人にその聞き方はないだろ」

今度は黒髪に赤いメッシュが入った子が話しかけてきて、赤髪の子がそれを止めた
「どこから説明すればいいか…」

俺が説明しようとした時だった

「俺に……俺にそのベルト下さい！」

そこに一人の男が名乗り出た

第話　　勇気を力に

「ぐへぇ！」

「……ったく…」

俺はとあるジムに来ていた
そして、情けない声を上げながら吹っ飛ばされた奴、三原　修だ
こいつの事を簡単に説明すると、モカ達の幼馴染、そして、先日デルタのベルトをくれと言ってきた張本人だ
俺もモカ経由で知り合った

話を元に戻そう。
俺は烈にベルトを渡す条件として、1発でも攻撃を当てたら渡してやると言ったが、結果は見ての通り。
まぁ、当たり前のことだが…

しかし、烈は諦めずに何度も何度も挑んできたが、今日は当てらてることも無く終わった

諦めそうだったが、以外だったな…

「お疲れ」
「なんだ？待ってたのか？」
ジムから出ると木場が待ち構えていた
「疲れてると思ってね。はい、パン」
「……ありがたく貰っておこう」
そう言ってパンの入った紙袋を受け取った
「でも、意外だったな。君なら俺の時見たく、すぐにベルトを渡しそうだったのに」
「何言ってんだ。お前は例外だ。そう易々とベルトわたしたりしねぇよ。それに…」
「それに？」

「生半可な気持ちと力で戦いに巻き込む訳にはいかないだろ」

ベルトを渡すとゆうことは、命懸けの戦いを強いられることになる
未熟なままで、戦いにだしたら待っているのは「死」だけだ

「……それもそうだね…」

「じゃあな」
「うん」

そう言って俺達はお互いの帰路に付いた

「何だかんだ言って、君はやっぱり優しいね…」

修ｓｅｉｄ

「はぁ……はぁ……まだだ……！」

リングの端に寄りかかりながら俺は立った

ベルトをくれと言って1週間が過ぎ、俺はあの日から諦めずに一也さんに挑んでいた

結果は毎日同じ。

でも、どうしてもあのベルトを手に入れて……！

「……お前…何でそこまでベルトが欲しいんだ？」

「え…？」

リングの中央に立つ一也さんが聞いてきた

いきなりの質問で驚いたけど、そんなことは決まってる

「俺は…オルフェノクに襲われた時、初めて……蘭達の本当に怯えた顔を見た……だから……」

「俺はもう、２度とアイツらの怯える顔を見たくないんだ!!」

それが俺の動機だ。小さい時から一緒にいるＡｆｔｅｒ　ｇｌｏｗのメンバー。そんな皆があんなに怯える姿を見たのは初めてだった

「それがお前の動機か…」

「はい!!」

俺が行き良いよく返事をした時、一也さんは微かに笑ったような気がした

「面白い。だったら、自分の手でそれを証明して見せろ!」

「言われなくても!」

再び、拳を構え、攻撃を仕掛ける

「それじゃあ、勝てないぞ」

迎え撃とうと、一也さんが出した拳が胸に当たる

「ぐっ…でも!」

「何?」

俺はその拳を両手を使って掴んで、一也さんの動きを止めた

「これならどうだァァァァ！」

まさか、攻撃を防ごうともせず、もろに受けるとは思ってなかったのか一也さんの反応が遅れた

その隙を狙って頭に狙って、回し蹴りを決めようと片足を上げた…

が、

「甘い」

「へ？」

蹴りを決めようとしたはずの俺は何故か地面に叩きつけられ、そして、顔の目の前には一也の拳があった

「な、何してたんですか…？」

「簡単だ。お前の足を祓った。パンチばっかで足技が来る事予測してなかっただろ？」

「マジかよ……」

これなら、行けると思ったのに……

そう思っていると、一也さんが俺の顔の横にあのアタッシュケースを落とした

「え？何で……」

「お前の気持ちは見させてもらった。腕はまだまだだが……持ってけ」

「本当ですか!?やったぁ！」

一也さんと別れたあと、俺はベルトを貰ったことを蘭達に伝えようとスマホを取った

すると、タイミングよく蘭から電話がかかってきた

「お？蘭？ちょうど今電話かけようと……」

『修！助けて！』
「!?どうした!?」
『この前の……怪物が……！』

電話の向こうから荒い生きつがかいが聞こえる。もしかして逃げてる最中か？

「分かった！すぐ行く！」

「待ってろよ！みんな！」

俺はアタッシュケースを持って駆け出した

「蘭！」

俺が蘭達が逃げてくる場所に駆けつけると、ちょうど蘭達もこちらに走ってきた

「修…」

相当な距離を走ったのだろう。５人全員が息を切らしていた

「追いついたぞ」
「!?」

　そして、あってつかの間、蘭達を追いかけていたオルフェノクが追いついた。そして、そのオルフェノクはあの日襲ってきたオルフェノクだった

「蘭、モカ、ひまり、つぐ、巴。少し下がってて」
「おい、烈。何言ってんだ!?」
「そうだよ！あんなのに立ち向かうなんて無茶だよ！」
　巴とひまりが声を上げた。

「確かに無茶かも知れない……けど…俺は！」
　一歩前に出て、ベルトを腰にまいた
「みんなを守ってみせる！」
「変身!!」
《ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ……ｃｏｍｐｌｅｔｅ》

「お前…まさか！」

手に持ったをベルトに差し込む。俺の体に白いラインが入っていく。俺の戦士としての名は……

「デルタ」

「仮面ライダーデルタ。それがお前を倒す戦士の名だ！」

「うおおおおお！」

雄叫びを上げ、オルフェノクに突撃していく

「初めて変身したやつが、調子に乗るんじゃねぇ！」

相手も反撃に拳を出してくる

「はぁ！」

「くっ」

それを交わし、胴体に拳を繰り出した

「まだまだァ！」

そして、そのままラッシュでパンチを繰り出した。が、

「甘い！」

「なっ！ぐっ！」

「修！」

蘭が吹き飛ばされた俺の名前を呼んだ

決まったと思ったけど、まだ駄目だったか…

「さっきも言ったはずだ。初めて変身したやつが調子に乗るんじゃないと」

1歩1歩、オルフェノクが近づいてくる

俺は砂埃を払いながら、ゆっくり立ち上がった

「確かに初めての変身だし、俺は一也さんのように強くない…」

そして、一呼吸置いて、Ａｆｔｅｒ　ｇｌｏｗのみんなを見たあと、こう言った

「けどな！Ａｆｔｅｒ　ｇｌｏｗのみんなを守りたい気持ちは、ずっと持ち続けてたんだよ!!」

「「「修（くん）…」」」

「なら、死んで後悔するんだな！」

再び、オルフェノクがこちらに向かって走ってくる

「ｃｈｅｃｋ！」

《ｅｘｃｅｅｄ　ｃｈａｒｇｅ》

「ぐっ…!?」

デルタフォンを構え、ベルトから白いフォトンブラットが腕まで来るのを確認して、引き金を引く
すると、白い三角の杭が放たれ、オルフェノクに突き刺さった
俺はそれに向かって、高く飛び、蹴りを入れた

「うぉぉぉぉぉ！」
「あぁぁぁぁ！」

俺が着地したと同時に、怪人にデルタの紋章が浮かび、赤い炎を上げて灰になり崩れ落ちた

「よっしゃァァァ！」
俺は天高くガッツポーズをした

一也ｓａｉｄ

『そっか、なら良かった』

修が変身者になった事を木場に連絡を入れた

『それにしても、幼馴染を守りたい、か。真っ直ぐでいいじゃないか。僕も似たようなものだから…』

「そうか…」

『君にも動機ってあったのかい？』

動機……

その時、俺の一つの記憶が蘇ってきた

思い出したくない……出来ることなら記憶から消したいもの……

『乾くん？』
「……あ、あぁ。悪い。そんなもんもう忘れちまったよ」
『そうか……じゃ、またね』
「あぁ」

そう言って電話を切った

「変な事思い出したな……」

やっぱり、俺は……

そんな事を考えながら、俺は自分の手を見ていた…

第13話　その男は何を思い、戦うのか

「一也！早く、早く！」
「分かったから引っ張るなって」

俺はリサと一緒に近くに新しくできたショッピングモールに来ていた
来たと言うよりも無理やり付き合わされたという方が正しいかもしれないが

「なんで俺が…」
「えー、だって一也、最近休んでないでしょ？」
「休ませてくれるなら、家でゆっくりしたいんだが…」
「そんな事言わずにさ。ほら、昨日だって、戦ってたわけだし、たまにはパーッと遊ばなくちゃ」
「昨日？」
「え？昨日戦ってなかったけ？修が灰が落ちてたって」

どういう事だ？俺は昨日オルフェノクとは遭遇していない。となると、木場が倒したってことになるが……あいつなら、一言何かいいそうだけど…

「え？一也じゃないの？」
「あ、あぁ」
「もしかして、まだベルトがあったりして」
「いや、それは無いは…」
「あれー？リサちーと一也くん？」

俺が喋ろとすると新たに別の声が響いた
後ろを振り返ってみると、帽子を被った日菜がいた

「あれ？日菜じゃん。どうしたの？」
「実はね、今日ここでライブするんだー」
「あー、パスパレ？」
「そうそう！屋外のステージ出やるんだけど、るん！て感じだね！」

日菜が目を輝かせながらそう言った。こいつとの付き合いもそれなりに長いが、未だにるんがどんなものかは分からないが

「それより、２人はデートなの？」
「は？」
「え／／／／／!?」

こいつはまた変な事を…

「無理やり連れてこられただけだ。そうだろ、リサ？」
「う、うん」

なんか歯切れが悪いな…

「こんな所にいたのか、日菜」

そんな事を話をしていると帽子とジャンパーを羽織った１人の男が話しかけてきた
見た感じ、パスパレのライブ関係のスタッフってとこか

「あ、隼人くん。どうしたの？」
「どうしたもこうもあるか。もうすぐ本番だぞ。ほら行くぞ！」
「えー！もっとリサちーたちと話してたいー！」
「知るか、そんな事」

そう言って日菜の襟を後ろから掴み強引に引っ張って行った。日菜は反抗していたが

「あ、そういう事だから、良かったら二人ともライブ来てねー」

そう言って、日菜は連行されていった

「行ってみるか？ライブ」
「う、うん」

それとさっきから気になってるんだが…

「顔赤いけど、大丈夫か？」

「だ、大丈夫、大丈夫！ほら、ライブ行こ！」

「皆さん！こんにちは！私達」

『ＰａｓｔｅｌＰａｌｅｔｔｅです！』

「やっぱ、日菜はなんでも出来るね～」

「…そうだな…」

屋外には、ライブステージが作られ、その上でパステルカラーの衣装に身を包んだ５人が演奏をしていた

確か、デビューライブで疑惑があったみたいだが……見たところちゃんと演奏出来てるな

「続きまして…！」
「きゃァァァァ！」
「!?」

ボーカルが次の曲に入ろうとＭＣをした時に悲鳴が鳴り響いた

「何処だァ！仮面ライダー!!」

やはり、悲鳴の原因だったのは、顔にトゲがたくさんついているオルフェノク――カクタスオルフェノクだった

「リサ！ここから逃げろ」
「う、うん！」

遅れてきたのが幸いだった。
みんな、オルフェノクから逃げようとするため、その人混みを掻き分けてオルフェノクのとこに行くのは一苦労だ

「何だ？お前？」
「これを見たら分かるだろ？」
《５・５・５》
《ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ……》

オルフェノクの近くまで行き、ファイズフォンを操作した

「変身！」
《ｃｏｍｐｌｅｔｅ》

「はぁあ！」
手首のスナップをきかせ、カクタスオルフェノクに向かって殴り掛かったが、それは受け止められた

「俺が用のあるのはお前じゃない！」
「ぐっ！」
そう言うと、同時に至近距離で体のトゲを飛ばしてきた
思わず、後ずさりをし、少し距離をとった
でも、俺以外のやつに用があるって事は…木場か修か？
「どけ」
そんな事を考えていると誰が俺の肩を掴み、後ろに押しのけた
「ッ！何す…ん…だ…!?」
俺を押しのけたのは、あの時、日菜を連れていった男だった
しかし、それ以上に驚いたのは、そいつの手に持っているもの。

そいつの手には俺達が持つものと似た黒いベルトが持たれていた
そいつは、俺の事は気にもとめずに、携帯を半回転させ、コードを入力する

《９・１・３》
《ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ…》

低い声で音声がなる

「変身」

そいつは顔の横まで携帯を持ってきて、ベルトに装着した

《ｃｏｍｐｌｅｔｅ》

体に２本の黄色い線が走り、黒に近いグレーの装甲で覆われていく。
顔にはχの文字が浮かんでいた

「４つ目の…ベルト…だと…!?」

俺が呆気に取られている間にもそいつはオルフェノクに向かっていった

「見つけたぞ！お前が…お前が俺の仲間をぉぉぉ！」

「ふん」

オルフェノクが激昂し、叫びながら向かっていく。

それとは対称的に、カイザは落ち着いていた。俺と同じでかなりの戦いをくぐり抜けてきた、そんな感じがした

「うぉぉぉ！」

「……」

オルフェノクが攻撃を仕掛けるが、顔の直前で受け止める

「ぐっ……！」

「お前の仲間なんて知らない。オルフェノクは悪でしか無いんだよ」
「何だと!?」
そう言うと、拳を受け止めている手とは逆の手でみぞうち辺りに向かって拳を突き出した
オルフェノクが後ずさりをするが、それに合わせて再び攻撃をしていく。
その拳から感じられたのは、恨み、憎しみといった負の感情だった
「てめぇ!」
オルフェノクも負けずと攻撃を仕掛けるが、防がれ、再び攻撃を受けた
完全にワンサイドゲームだった
「はぁ…はぁ…はぁ…」
「そろそろ、終わりにするか」
《ｒａｄｙ》
腰に着いている武器を取り、ミッションメモリーを差し込む。すると、黄色い剣が出

現した

「ひぃ、ひぃぃぃ！」

それを見てオルフェノクが背中を向けて逃げ出した

銃口を向け、引き金を引くと、黄色いマーカーが放たれオルフェノクの動きを封じた

剣を構え、オルフェノクに向かって飛び込んだ

「消えろ」

「あ、ァァァァァァ！」

攻撃が決まると、χの文字が浮かび上がり、オルフェノクは灰となった……

お互い、変身を解いた

「お前か、銀色の戦士ってのは」
「…あぁ、乾　一也だ」
「そうか…」

そう言うと、そいつはその場から立ち去ろうとした

「おい！人の名前を聞いておいて、お前は名乗らないのかよ」
「はぁ……草加　隼人。これで満足か？」
「……あぁ」

草加は、俺の返事を聞くと、その場を立ち去っていった

それにしても、さっきの戦い方…
木場と修は自分の大切な人を守るためにベルトを手に取った。
けどあいつと違う。オルフェノクに対して憎しみや恨みしかなかった。
「いや…俺もあいつと同じか…。他人のためより、自分の存在のために戦ってんだから…」

とは言え、４本目のベルトか……
まさか、これ以上は無い…よな？

「あれが、ファイズとカイザか。面白そうな２人だなぁ」
俺と草加を空から見下ろす１つの影。
腰にはベルトを巻き、その顔にはΨの文字があった…

第１４話　世界中に笑顔を

「ここか…」

俺は、公園や病院などでライブをやっている、ハロー、ハッピーワールド！というバンドがあると聞いて、これからライブ予定の公園に向かっていた

街では、そこそこ噂になっているのでオルフェノクも狙ってくるだろう

「意外と人が集まってる…」

俺が着いた時にはたくさんの人がいた。

人、と言っても、子供が多かった

こんな所で暴れられたら一溜りもない
気を引き締めて行かないとな

「お兄さん、難しい顔してどうしたの？」

そんな事を考えながら周りを見回していると、１人の男が話しかけてきた

「別に…お前には関係ないだろ」

「そういう訳にも行かないな。
彼女たちはさ、世界を笑顔にするためにライブやってるんだから。
そのライブで辛気臭い顔されたらたまったもんじゃないよ。お兄さんも笑顔になってよね」

「はぁ？」

「じゃ、僕は行くねー」

そう言うと、その男は立ち去っていった

なんだったんだ、あいつ……？

そうこうしていると、ライブが始まった。
流れてくる音楽は、確か、電波系ってやつだったか？Ｒｏｓｅｌｉａとは全く違うものだった

来ていた子供たちにも受けがよく、会場は笑顔で溢れていた

それにしても、世界を笑顔に、か
ふと、さっき男が言った言葉を思い出した
そう言えば、最後に思いっきり笑ったのはいつだっただろうか…

俺も、リサやＲｏｓｅｌｉａのみんなとそんなふうに笑い合える日がくるのだろうか……

いや、そんな日は来ないだろう

だって、俺は……

「きゃぁぁぁぁ！」

「!?」

俺の思考を打ち破るように、子供たちの悲鳴が聞こえた

演奏をしている方に目を向けると、オウルオルフェノクが空から降りて、ボーカルの奴を掴もうとした

「させるか！」

《１・０・６　　ｂｕｒｓｔ　ｍｏｄｅ》

素早くコードを入力し、ファイズフォンを変形させ、引き金を引く

「ぬわっ！」

空中に浮かんでいたこともあり、オルフェノクが行きよいよく飛ばされる

「今のうちにさっさと逃げろ！」

と、言うが周りにいるほとんどが子供たちだ。

いきなり現れた怪物に驚き、泣き叫び、混乱状態にあった

「今のうちだ！」

「ふえ？」

手間取っていると、フクロウオルフェノクは近くいたバンドでドラムをしていた女子をを掴み、飛び上がった

「ふぇぇぇぇ!?」

「クソっ！」

うち落とそうと、ファイズフォンを構えるが、ちょうど攫われた子が盾になるように持っていた

「ハハッ！ここまで来てみろ！」

「くっ！」

やばい、このままだと…！

そう思った時だった

「だったら、僕が行ってあげるよ！」
「何!?」

オルフェノクのさらに上、そこに1つの影が入った
そいつは人質を奪い、地上に向かってオルフェノクを蹴り落とした

「大丈夫？かのちゃん♪」
「れ、玲央くん!?あ、ありがとう…」

ゆっくりと降りてきたそいつは、白いボディに青い線。そして、俺のとよく似た銀色のベルト。
こいつは、間違いなく…
彼女を地上に下ろすと、俺の前に来て変身を解いた

「お前、さっきの…」
「自己紹介がまだだったね。僕は仮面ライダーサイガ。大空　玲央だ。よろしくね？」
「あ、あぁ」

「貴様！よくもやってくれたなぁ！」
「詳しい話は後のようだね。かのちゃん、君はどっか隠れてて」
「わかったよ。無茶しないでね」

そう言うと、後ろにいたバンドメンバーと共に逃げていった

「さて、一緒に戦おうよ。ファイズ」
「なんで、初めてあったお前と…」
「僕はね、親の仕事の関係で世界の色んな所に行ったんだ」
「そこであった人がこう言ってだんだ『ライダーは助け合いでしょ』ってね」
「……」
「そういう訳だけど…どうする？」

「……わかった」
「よし！じゃあ、さっさとケリを付けようか」

大空がニヤリと笑いながら、オルフェノクの方を向いた

《５・５・５》
《３・１・５》
《ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ……》

「「変身！」」

ｃｏｍｐｌｅｔｅ

「行くよ！」
「あぁ！」

「はぁっ！」

握った拳を一直線に繰り出していく

「くっ！」

「逃がさないよ！」

「ぬぉっ！」

羽を使い、宇宙へ逃げようとするオルフェノクが撃ち落とされた

後ろを振り返ってみると、バックパックを前に突き出し、銃として構えるサイガがいた

そして、好機を逃がさす、畳み掛ける

「これで決める！」

「ＯＫ♪」

ｅｘｃｅｅｄ　ｃｈａｎｇｅ

俺は右手に握った、ファイズショットに、サイガは、バックパックを外し、そこから現れた2本のトンファーにフォトンブラットが流れていく

「やぁぁぁぁぁ！」

「はぁ！」

サイガが先に走り出し、トンファーによる2連撃を決め、続けて俺も腹に向かって、深く拳を突きつけた

「ぬぉぉぉぉぉぉ！」

青いΨと赤いΦの記号が浮かび、青い炎を上げて、オルフェノクは灰になった

「お前、オルフェノクの事について知ってる事があるのか？」

「それよりさ、お兄さんはオルフェノクのことをどう思う？」
「それは……」
俺は言葉に詰まったが、大空は続けた
「僕はオルフェノクと人間は共存出来ると思う」
「何を根拠に……」
「だって、僕がいるから」
「……？」
「僕、オルフェノクと人間のハーフなんだ」
……は？
一瞬、思考が停止したが、すぐにこいつの言ったのことを理解した
「あれ？聞こえなかった？僕ね、」
「いや、聞こえてる！それよりも、どういう意味だ！説明…」

「あ！オルフェノクについてだったよね！ひとつだけ気になってる事はあるよ」

「人の話を聞けよ……」

大空は俺の話を聞かずに、オルフェノクについて話し出した

こいつ、身体の割に意外と年取ってないんじゃ…

「スマートミュージックレコードって知ってる？」

「スマート…？」

「ＳＭＲともいうかな。ほら、フューチャー・ワールド・ロックフェスなんかを主催してるとこ」

「!?」

俺はその言葉を聞いた時驚愕した。

たしかに、レコード会社が黒幕となると、音楽関係の人間が連れ去られていることに納得がつく

けど……それよりも……

???side

――ＳＭＲ　社長室

「５人目のライダー、ですか」
「はい、以前盗まれたサイガドライバーで変身したものと思われます」
「そうか、報告ご苦労。君は下がっていい」
「はい」

報告してくれた人物とは別の人物が入れ替わりで入ってきた

「どうするのかしら？」

「なに、私達がやる事は変わらないさ」

「それもそうね。それより、彼女の件、私がスカウトに行くことになったから」

「そうですか。なら、安心ですね。期待してますよ」

「ええ」

ベルトの戦士が5人いるとはいえ、計画は順調だ

ただ、気がかりなのは、ファイズが現れる前にいた、オルフェノクを狩るオルフェノク…

最近では現れませんが、正直やっかいな存在です…

中の上、といったところか……

一也ｓｉｄｅ

「ＳＭＲか…」

誰もいない公園のベンチに座り呟いた

もし、大空が疑っていることが、事実なら、フューチャーワールドロックフェスも何かしら関係してくるかもしれない

フェスに参加することは危険な行為だ。

しかし、参加を辞めさせることは、友希那の目標を……いや、夢を奪う事になる

俺にそんな事ができるのか……？